平成２４年１１月９日

平成２４年「まほろば会秋の見学旅行」資料

平成２４年１１月９日（金）～１１月１１日（日）

下関・萩・山口（長州路）

まほろば会

はじめに

今回の見学旅行では、長州路（下関・萩・山口）を訪ねます。「長州」というと、幕末に活躍した尊皇攘夷派の志士たちや、伊藤博文・木戸孝允のように明治政府の要人になった人物がすぐに思い起こされますが、時代をもっと遡ると、今年ＮＨＫ大河ドラマ「平清盛」の歴史的舞台である「壇ノ浦」も山口県なのです。

集合場所を「北九州空港」としました。山口県の「下関」に入る前に、「門司港駅」を見てみようと思います。大正３年に建てられた左右対称のレトロな駅舎です。しかし残念なことに、現在門司港駅は大改修中です。来年３月までは外観は見られそうなので寄ってみましょう。そこからバスで数分行くと、「源平壇ノ浦合戦絵巻壁画」のある「和布刈」地区です。ここから「関門人道トンネル」を通っていよいよ「下関」に渡ります。何と、福岡県側・山口県側の両方から「壇ノ浦」を眺望することが出来る贅沢な旅なのです！

２日目に訪問する「土井ヶ浜遺跡」は、日本人のルーツを探るうえでのキースポットです。まさに「まほろば会」の真骨頂！３００体に及ぶ「弥生人骨」は圧巻です。

長門市仙崎出身の「金子みすゞ」は、昨年の東日本大震災で改めて注目を浴び、かの「上戸彩」を要してテレビドラマが放映されたほどです。「こだまでしょうかーーー。」２日目は強行軍で、人骨・みすゞの後は風情ある町並みや自然美が魅力の「萩」を回ります。見所満載ですが時間との勝負ですね！疲れた身体はどうぞ萩一番の宿「萩本陣」で労わってあげてください。

最終日には、山口県が誇る「国宝　瑠璃光寺五重塔」を見学します。奈良の法隆寺、京都の醍醐寺とともに「日本三名塔」の一つに挙げられています。室町時代には有力大名大内氏が支配する中心地として「西の京」と謳われるほど栄華を極め、江戸時代には「萩往還」の重要な中継地としての役割を担った「山口タウン」を散策します。

それでは、２泊３日の「まほろば会秋の見学旅行（長州路）」を、一緒に楽しみましょう。

幹事一同

平成２４年度　まほろば会秋の見学旅行（長州路）予定表

日程　　平成２４年１１月９日（金）から１１日（日）までの２泊３日の旅行です。

集合　　１１月９日（金）１１時　までに　北九州空港「１階国内線到着ロビー」に集合します。

　　＊全員集合ののち、サンデン旅行社のバスに乗車し下記「見学予定地」を回ります。

解散　　１１月１１日（日）１６時ごろ　山口宇部空港「２階国内線出発ロビー」にて解散します。

見学予定地

１１月　９日（金）	門司港駅（駅舎）・和布刈神社・源平壇ノ浦合戦絵巻壁画	北九州市門司区門司	
	関門人道トンネル	北九州市門司区から山口県下関市へ	
	（昼食）「ふくの関火の山店」	下関市みもすそ川町火の山	℡０８３－２２３－２９４６
	みもすそ川公園、義経･知盛像、壇ノ浦古戦場跡	下関市みもすそ川町	
	赤間神宮	下関市阿弥陀寺町４－１	℡０８３－２３１－４１３８
	日清講和記念館（春帆楼）	下関市阿弥陀寺町４－２	℡０８３－２５４－４６９７
	綾羅木郷遺跡	下関市綾羅木町	TEL083-254-3061
	下関市立考古博物館（地蔵堂遺跡）	下関市綾羅木岡４５４	℡０８３－２５４－３０６１
	（宿泊地）川棚温泉「子天狗」	下関市豊浦町川棚５１５３	℡０８３－７７２－０２１５
１１月１０日（土）	土井ヶ浜遺跡（人類学ミュージアム）	下関市豊北町大字神田上 891-8	℡０８３－７８８－１８４１
	角島灯台	下関市豊北町角島	
	（昼食）海鮮村「北長門」	長門市三隅下６３８－１	℡０８３７－４３－２６００
	みすゞ通り・極楽寺	長門市仙崎新町 1504-1	
	金子みすゞ記念館	長門市仙崎１３０８	℡０８３７－２６－５１５５
	八坂神社	長門市仙崎祇園町１３４２	
	松下村塾・松蔭神社	萩市椿東松本	℡０８３８－２２－４６４３
	伊藤博文別邸	萩市椿東新道１５１１－１	℡0838-25-3139（萩市観光課）
	木戸孝允旧宅	萩市呉服町２	℡0838-25-3139（萩市観光課）
	菊屋横町・菊屋家住宅	萩市呉服町１－１	℡０８３８－２５－８２８２
	旧久保田家住宅	萩市呉服町１－３１－５	℡0838-25-3139（萩市観光課）
	高杉晋作誕生地　萩市南古萩町２３	堀内伝建地区　萩市堀内	
	萩城跡・指月公園	萩市堀内二区城内１－１	℡０８３８－２５－１８２６
	（宿泊地）源泉の宿「萩本陣」	萩市椿東３８５－８	℡０８３８－２２－５２５２
１１月１１日（日）	常栄寺（雪舟庭）	山口市宮野下２００１	℡０８３－９２２－２２７２
	山口市菜香亭	山口市天花１－２－７	℡０８３－９３４－３３１２
	八坂神社・龍福寺（ともに「重文」）	山口市上竪小路１００	℡０８３－９２２－００８３
	瑠璃光寺五重塔（国宝）・香山公園	山口市香山町７－１	℡083-934-2810（山口市観光課）
	（昼食）山口観光会館「長州苑」	山口市宮野下２００２－５	℡０８３－９２５－５８５０
	山口県立山口博物館	山口市春日町８－２	℡０８３－９２２－０２９４
	山口サビエル記念聖堂	山口市亀山町４－１B	℡０８３－９２０－１５４９

門司港駅

駅舎はドイツ人技師ヘルマン・ルムシュッテルの監修の下に、1914 年（大正 3 年）1 月に建築された木造駅舎で、ネオ・ルネッサンス様式と呼ばれる左右対称の外観デザインが特徴であり、1988 年に駅舎としては全国で初めて国の重要文化財に指定された。駅構内には戦前から使用されている洗面所、手水鉢、上水道など様々な歴史的資産が存在する。現在は別用途に使用されているが、「一・二等客待合室」・「チッキ（手荷物）取扱所」・「貴賓室」・「関門連絡船通路跡」等も残されている。特に関門連絡船通路跡には旧日本軍の命令で設置された渡航者用監視窓の跡も残っている。これは当駅が外来航路の寄港地だったため、戦時下の不審者を発見する格好の場所だったとされるためである。開業後 100 年近くが経過し、シロアリ被害や老朽化による腐食でゆがみや亀裂が生じていることが分かったため、国・福岡県・北九州市・JR 九州が話し合いを行い、2012 年 9 月から本格的な改修工事を開始した。このため 2012 年 9 月 28 日限りで開業時からの駅舎での営業を休止し、翌 29 日から仮駅舎に移行している。工事完了は 2018 年 3 月の予定。

←幸福の手水鉢

和布刈神社

社伝で伝えられる限りでは神功皇后の三韓征伐後奉祀されたもので仲哀天皇 9 年（200 年）創建とされる。古くは「隼人明神」とも呼ばれた。壇ノ浦の戦いの前夜には平家一門が酒宴を開いたと伝えられる。海峡の守護神として崇敬を集め、建武 3 年（1336 年）足利尊氏、応永年間（1394 年～1428 年）大内義弘、天正 3 年（1575 年）仁保常陸介などによる諸社殿の修築造営が伝えられている。現社殿は明和 4 年（1767 年）小倉藩主小笠原忠聡の再建によるものである。神社名となっている「和布刈」とは「ワカメを刈る」の意であり、毎年旧暦元旦の未明に三人の神職がそれぞれ松明、手桶、鎌を持って神社の前の関門海峡に入り、海岸でワカメを刈り採って、神前に供える「和布刈神事」（めかりしんじ）が行われる。和銅 3 年（710 年）には神事で供えられたワカメが朝廷に献上されているとの記述が残っている。福岡県の無形文化財に指定されている。

源平壇ノ浦合戦絵巻絵画

見る者を圧倒する、有田焼の巨大壁画。門司・和布刈（めかり）公園内の第2展望台にある、高さ3m、長さ44m、有田焼レリーフ約1，400枚で制作された巨大壁画。「安徳天皇縁起図（赤間神宮所蔵）」を複製したそうですが、精巧・緻密で迫力満点、門司側から見る関門海峡の景色も絶景。

関門人道トンネル

1958年に21年の年月をかけて完成した、下関と門司をつなぐ関門トンネル。エレベーターで地下約50mまで降りると約780mの人道トンネルがあり、歩いて約15分で本州と九州を行き来することができる。壁には海草や魚、天井には朝、昼、夕、夜の空が描かれていて、夜の空は星が光る演出がされている。 本州と九州を歩いて横断できる人道トンネル。

人道出入口。左は門司側、右は下関側

みもすそ川公園

みもすそ川公園（みもすそがわこうえん）は、山口県下関市にある公園。源平合戦の最後の舞台となった壇ノ浦に面し、国道 9 号と関門海峡に挟まれて立地する。施設内には、「長州砲のレプリカ」がある。当公園は幕末の下関戦争時に活躍した長州藩の砲台跡であることから、5 門のレプリカが海峡に向けて設置されている。うち 1 門は、硬貨を投入することで砲撃音と煙の演出を楽しむことができる。その他、「壇ノ浦古戦場址碑」・「安徳帝御入水之処碑（二位尼による辞世「**今ぞ知る　みもすそ川の　御ながれ　波の下にも　みやこありとは**」が刻まれる。）」・「御裳川（みもすそがわ）碑（御裳川はこの場所で関門海峡に注ぐ小河川だったが、現在の河口は公園と国道の下に隠れている。）」・「源義経と平知盛像（義経は八艘跳び、知盛は錨を担いだ姿で、両雄が対峙する位置関係に設置。）」・「NHK 大河ドラマ『義経』出演者の銅板手形（滝沢秀明（源義経役）、中越典子（建礼門院徳子役）、小泉孝太郎（平資盛役）、松坂慶子（二位尼役）の手形）」・「松本清張文学碑 （作家・松本清張が、幼少時の一時期に下関市に住んでいたことを記念したもの。自叙伝的小説『半生の記』の一節が刻まれている。中央に開いた穴からは、関門海峡を挟んだ対岸にある和布刈神社（小説『時間の習俗』の舞台）が望める趣向となっている。）」などがある。

壇ノ浦古戦場址の碑

赤間神宮

鳥居と水天門

山口県下関市阿弥陀寺（あみだじ）町に鎮座。祭神は安徳（あんとく）天皇。1185 年（文治 1）壇ノ浦の戦いで祖母二位尼（にいのあま）（平清盛の妻）に抱かれて入水、崩御し、赤間関紅石（べにいし）山麓（さんろく）の阿弥陀寺に葬られたが、1191 年（建久 2）後鳥羽（ごとば）天皇は勅して御陵の上に御影堂（みえいどう）を建立、阿弥陀寺を勅願寺とした。以来皇室の厚い崇敬を受けてきたが、明治維新の神仏分離により阿弥陀寺は廃され、1875 年（明治 8）御影堂を赤間宮と改称、官幣中社に列した。1940 年（昭和 15）官幣大社に昇格、神宮号を宣下された。4 月 23～25 日の先帝祭（せんていさい）は有名で、安徳天皇、平家一門をしのんで斎行される。社宝に長門（ながと）本『平家物語』20 巻（国指定重要文化財）がある。

日清講和記念館（春帆楼）

記念館

会議の部屋

伊藤・陸奥胸像

明治２８年（１８９５年）３月２０日から、料亭「春帆楼」において日清戦争の講和会議が開催された。この会議には日本全権の伊藤博文、陸奥宗光、清国全権の李鴻章をはじめ両国の代表１１名が出席した。講和に向けて会議はくり返し行われ、４月１７日に講和条約が調印された。

この記念館は、日清講和会議と下関講和条約の歴史的意義を後世に伝えるため、昭和１２年（１９３７年）６月、講和会議の舞台となった「春帆楼」の隣接地に開館された。講和会議で使用された調度品、両国全権の伊藤博文や李鴻章の遺墨などを展示している。また、館内中央には講和会議の部屋を再現し、当時の様子を紹介している。明治２８年(1895 年)３月２４日、第３回目の会議を終えた李鴻章は、宿舎である引接寺への帰途、小山豊太郎という青年に狙撃された。この事件によって会議は一時休会し、負傷した李鴻章には明治天皇をはじめ各方面からも多くの見舞いが寄せられた。そのかいもあり、まもなく李鴻章は快復し、４月１０日に会議は再開された。事件後、李鴻章は大通りを避け、山沿いの小径を往復した。この小径は、いつしか「李鴻章道」とよばれるようになった。

春帆楼は、もと阿弥陀寺の方丈のあった所で、同寺が廃寺となった後、もと豊前の国の眼科医藤野玄洋が買収して、医院を営んでいた所であるが、玄洋の死後、未亡人ミチが旅館兼料亭として経営し、明治２８年（１８９５年）３月に開かれた日清講和会議の会場に使用されたことにより、一躍全国にその名を知られるようになった。

下関市立考古博物館

下関市立考古博物館は、国の史跡・綾羅木郷遺跡に隣接して平成７年５月１３日に開館した。屋外の遺跡公園は「史跡の道」ルート上に位置し、古墳や竪穴住居も復元され、市民の憩いの広場として親しまれている。館内には下関市域を中心とした弥生・古墳時代の考古資料を展示している。

●山口県下関市

綾羅木郷遺跡

あやらぎごういせき

弥生時代の竪穴式貯蔵穴群

竜王山の東麓から発した綾羅木川北岸、響灘を見下ろす台地上にあるのが綾羅木郷遺跡です。弥生時代前期後半頃に営まれたと思われる遺跡で、千基以上もの竪穴式貯蔵穴とそれらを取り囲む環濠が確認されています。

綾羅木郷遺跡では、弥生時代の溝や貯蔵穴、土坑といった遺構は確認されていますが、住居跡が残されていません。その理由として、台地が削られて、かつて存在した住居の痕跡を失ったとも、元来この台地が貯蔵のための空間であり、居住空間は別にあったとも考えられています。

栽培されていたコメ、ムギなどの穀類や、モモ、ウメ、クリなどの種子が炭化した状態で発見されており、貯蔵穴からは、それらを入れていた壺などが出土しています。また、日常土器に加えて磨製石庖丁、石鎌、石斧、石鏃などが出土しています。

貯蔵用竪穴のジオラマ。手前は発掘作業、奥は弥生時代の様子を表している

密集する貯蔵穴群の遺構検出状況

一方、土製や石製の漁網の錘、ヤスなどの獣骨製刺突具、鯨骨製アワビオコシなどが見つかっていることから、海での漁も盛んであったことがわかります。

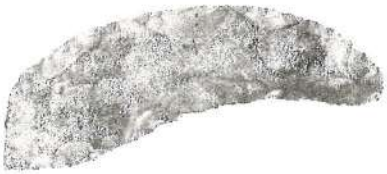
興味深い出土品は、陶塤という卵形の古代の土笛で、中国からきたもののようです。また、長崎県壱岐の原の辻遺跡では、卵形のココヤシ製の笛が見つかっています。

綾羅木郷集落は弥生時代中期にその規模が急速に縮小したようです。その原因の一つとして、海進が考えられます。当時は、現在より二メートルほども海水面が高くなったようで、周辺にある耕作地の高潮による塩害を避けて、人々はより高い小尾根に分散、移住したと推測されます。

隣接している下関市立考古博物館では貯蔵用竪穴の様子や、出土品が展示されています。

人面土製品。高さ八・七センチ

炭化米



石鎌。長さ23.2cm

出土した陶塤。残存高七・一センチ

●山口県下関市

地蔵堂遺跡

じぞうどういせき

蓋弓帽が示唆する中国とのかかわり

地蔵堂遺跡は綾羅木郷遺跡から南へ二キロメートル、下関市稗田の標高四四メートルほどの小丘陵上にあります。

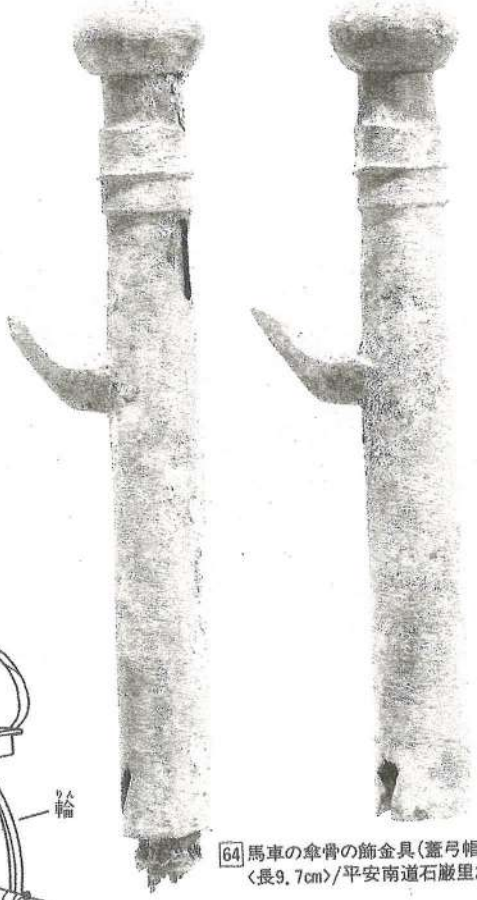
昭和四四年（一九六九）、宅地造成中に一基の箱式石棺が出土しました。石棺は破壊されてしまいましたが、副葬されていた二点の蓋弓帽と内行花文清白鏡一面が採集されました。蓋弓帽とは、古代中国で位の高い人が乗る馬車の上に取り付けられていた傘の骨の先端につく鉤です。古代中国の馬車は車体に覆いがなかったため、雨や日光を避けるための大型の傘が取り付けられ、その覆い布の端を骨の先の鉤にかけていたのです。この中国製の金銅製蓋弓帽には四弁の花形飾りが施されており、花心には熊の姿があしらわれ、全面に美しい鍍金（メッキ）が見られます。

中国前漢期の蓋弓帽がどのような経路を経て伝わったのか、また、伝わったのが部品だけなのか馬車一式なのかはまだわかりません。

蓋弓帽

馬車の飾り

楽浪郡



64 馬車の傘骨の飾金具(蓋弓帽)
〈長9.7cm〉/平安南道石巌里201号墳

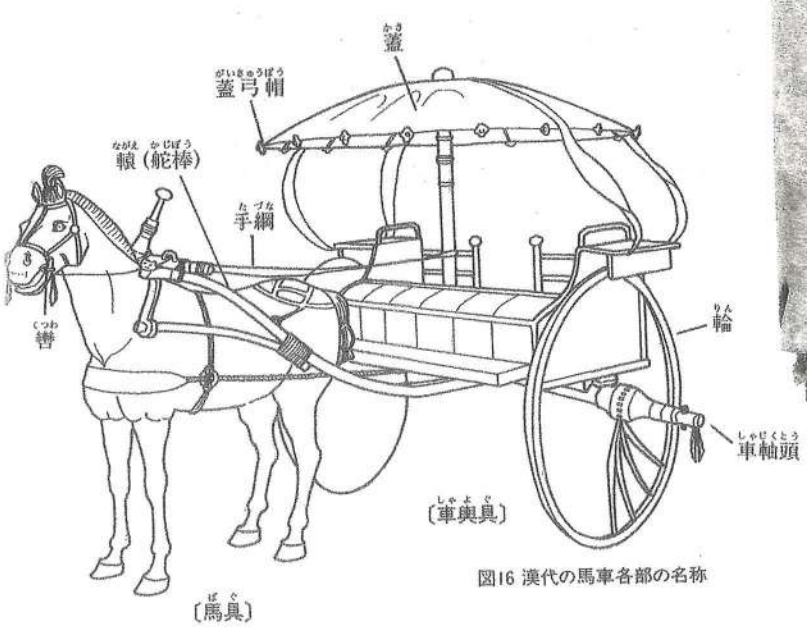


図16 漢代の馬車各部の名称

漢代の馬車

この時代の馬車は、戦車としての使用がほとんどなくなり、官吏や富裕層の乗物として盛んに用いられた。

馬車の構造にも変化が現われ、一本の舵棒の両側に複数の馬をつなぐ方法から、二本の舵棒の間に、一頭の馬をつなぐ方法になった。後者の方が効率的であり、前漢の末期になると、ほとんどが新しい方法に変化する。

また、馬車は屋根の構造から男性用と女性用に分けられ男性用は蓋(大きな傘形の屋根)が、女性用にはかまぼこ形の幌が使われていた。後者の場合は、荷物を運ぶ用途にも使用されている。

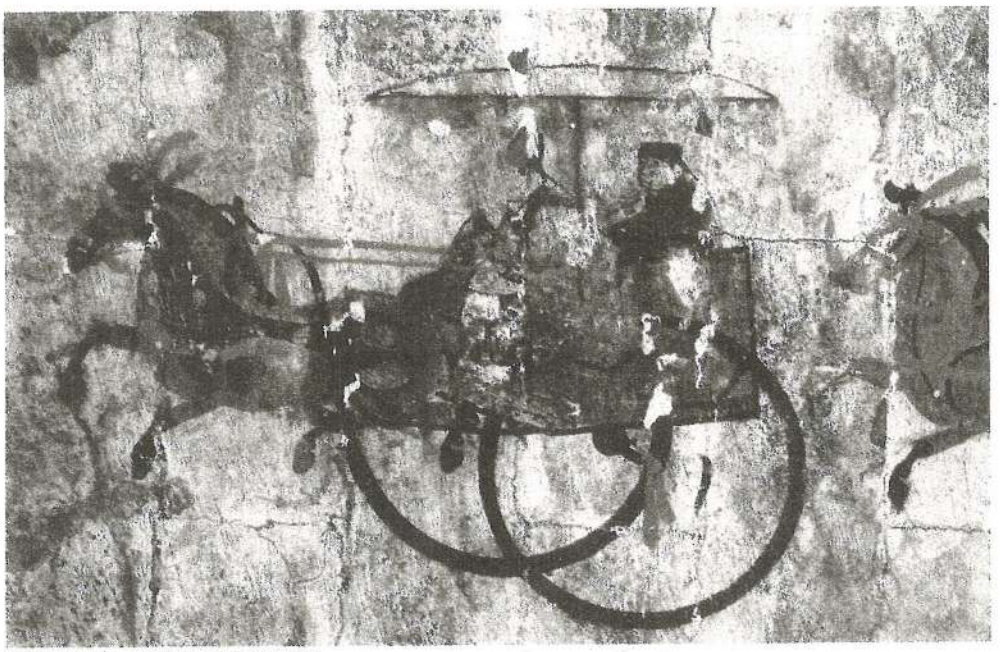
楽浪漢墓でのあり方

車馬具の副葬は初期の段階から認められ、当初は在地的なものを含むが、紀元前一世紀の後半頃から漢の影響が強くなる。また、車馬具の副葬は二世紀頃に一旦途絶え、三世紀代には明器(墓に副葬するために特別に誂えた器物)が副葬されるようになる。年代が下るにつれて車馬具は実用品としてではなく、宝器として副葬される傾向を示す。

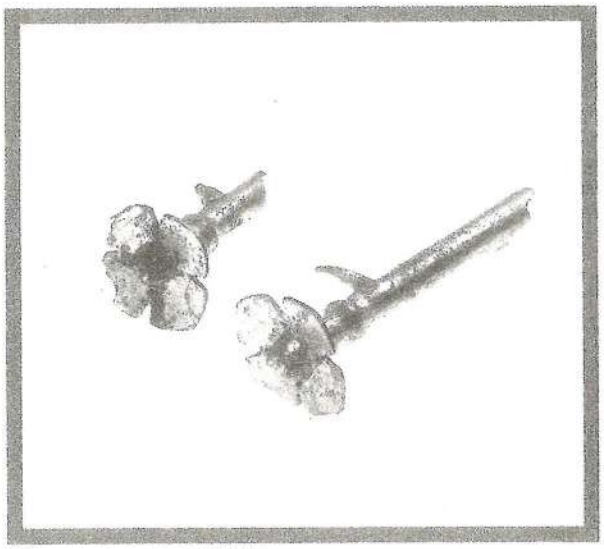
また車馬具の場合にも、漆器と同じく副葬の有無やその種類、数量に、被葬者の階層的な差異が反映されている。

副葬される車馬具は、馬具(馬に取付けるもの)と車輿具(馬車本体に取付けるもの)に分類される。馬具には、馬鈴、馬面(馬の顔に付ける装飾品)、轡(馬の口にかませて手綱をつけ馬を制御するもの)、絞具(革帯等の留金具)、飾鋲(革帯等に付ける飾り)などがあり、車輿具としては、車軸頭(車軸両端の飾り金具)、蓋弓帽(傘骨の先端に付ける飾り金具)などがある。

車馬具を比較的多く副葬する各時期の代表的な墓には、石巌里二一九号墳(前一世紀)、石巌里九号墳・



65 馬車を描いた壁画/安平東漢壁画墓



66 日本にもたらされた蓋弓帽/山口

〈蓋弓帽〉
地蔵堂遺跡
副葬用宝・器
日本で唯一例

貞柏里一二七号墳・石巌里一九四号墳・石巌里二〇〇号墳(一世紀)、南井里一一六号墳(三世紀)などがあげられる。

石巌里二一九号墳の場合は、東西に二つの墓室を持つ木槨墓で車馬具の大部分は西室から発見された。東室からは車軸頭が二点のみ見つかっている。西室に副葬された主要な車馬具には、金銅製車軸頭二点、銀・金銅・銅製の蓋弓帽九二点、金銅製馬面六点、鉄製轡四点、銅製馬鈴四点、玉の付いた銀製飾金具一三点などがある。

石巌里九号墳では、外郭の西壁側に車馬具が副葬されていた。その内訳は、銅製車軸頭二点、先端宝珠形銅製蓋弓帽二六点、金銅製馬面二点、金銅製轡二点、銅製馬鈴三点、金銅製飾金具二九点、金銅・鉄製絞具一一点、金銅製飾鋲一五一点、金銅製環(リング)五点である。

石巌里一九四号墳の場合は、木槨外郭の北東部から馬具が、南西部から車輿具がそれぞれ発見されている。先端宝珠形銅製蓋弓帽三二点、先端欠環状銅製蓋弓帽二点、銅製馬面二点、銅製轡二点、銅製飾鋲四二点、銅製絞具三点、鉄製環・鎖三点であるが、車軸頭は見つかっていない。

南井里一一六号墳においては、主室、副室、羨道部より木製明器の馬、車輪などが発見されており、木製明器の馬と馬車がセットで副葬されていたと考えられる。

日本への影響

我国へは、馬車そのものは伝わらなかったが、山口県下関市地蔵堂遺跡から、馬車の蓋弓帽(傘骨の先端に付ける飾り金具)二点が前漢鏡や管玉と共に見つかっている。

ここでは、前一世紀後半頃の箱式石棺の副葬品であった。金メッキされた優品で、先端が四葉形になりその中心に熊の顔が付いており、柳の柄が残っていた。おそらく、宝器として王墓に副葬されたものであろう。

●山口県豊浦郡

土井ヶ浜遺跡

どいがはまいせき

三〇〇体に及ぶ弥生人骨が出土

土井ヶ浜遺跡は本州最西端、山口県の響灘（ひびきなだ）にほど近い弥生時代の埋葬跡です。土井ヶ浜には、海からの西風によって砂が堆積した砂丘陵があります。この砂丘を弥生人たちが墓所として使用するようになったのは、弥生時代中期の頃からです。

発掘調査は昭和二八年（一九五三）から始まり、昭和六三年（一九八八）まで一一回実施されています。その結果、三〇〇体にも及ぶ弥生人の人骨を採集することができました。保存状態が良好な弥生人骨がこれほど多く出土した例は、土井ヶ浜遺跡のほかにはありません。それは砂丘の砂に多量に含まれていた貝の石灰分が骨を守っていたからです。そのため、鵜を胸に抱いた姿で葬られた女性人骨や、多くの矢を打ちこまれた男性の人骨も残っていました。これらは、鵜飼いの風習や戦闘か処刑のやり方を示唆してくれます。

注目されたのは埋葬時の遺体の向きでした。彼らは頭を東、足を西にしており、少し頭をあげさせて顔が西側、つまり海の方向を向くように埋葬されていたのです。土井ヶ浜人が海を強く意識していたことは、ほぼ間違いありません。

採集された数多くの弥生人骨を研究した結果、縄文人とは明らかに異なる容貌（ようぼう）であったことがわかりました。おしなべて土井ヶ浜人の顔立ちは、頭は前後に長くて幅は狭く、顔は面長で鼻のつけ根が扁平（へんぺい）です。さらに、縄文人に比べて背が高いことから、弥生人の起源を考える上で貴重な資料となりました。彼らは朝鮮半島を含む大陸からの渡来系の人々であったという説が有力です。

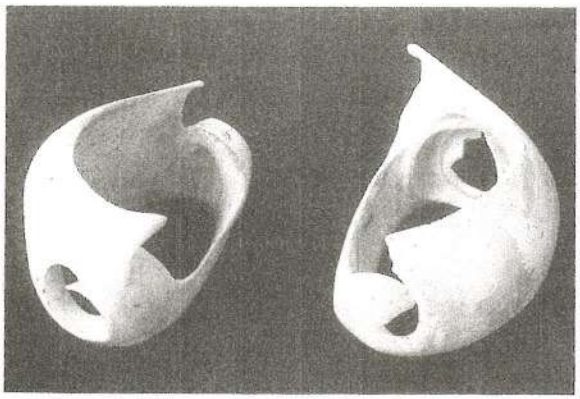
海にほど近い土井ヶ浜遺跡（○印）

土井ヶ浜ドームに保存されている埋葬人骨（顔面を西に向けている）

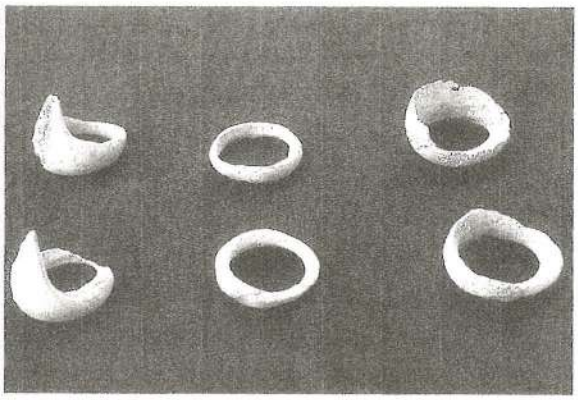
独特な形状の貝製品が出土

土井ヶ浜遺跡からは、さまざまな弥生時代の遺物が出土しています。中でも本来沖縄や奄美大島でしか採れない南海産のイモガイやゴホウラを原材料とした装身具の存在は、ここにも貝の流通経路、いわゆる「貝の道」が通じていて、貝が運ばれ、加工されたことを示しています。特にゴホウラ製の貝輪の形状は、ほかの遺跡では見られない独特なものです。

この遺跡は、土井ヶ浜弥生パークとして一般公開されています。その中心施設である土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムでは、遺跡の全貌や出土品などを随時見学することができます。遺跡の中でも最も人骨の密度が高かった部分にはドームが設けられており、約八〇体の人骨（レプリカ）が出土した状態で展示されています。



南海産のゴホウラでつくった貝輪



巻貝でつくった指輪

日本列島へのヒトの動き
「科学」2010年4月号

溝口優司

10万年以上前にアフリカを出たホモ・サピエンス（新人）

①6-5万年前に東南アジアへ辿りつく

②その中の一部の人々はそこから北へ

③別の一部の人々は南東へと移動、スンダーランドから遅くとも3万年前頃までにオーストラリア南東部に到達、オーストラリア先住民（アボリジニ）の祖先に

④一方、北へ移動した人々は、シベリア、北東アジア、日本列島、琉球諸島を含む南西諸島になどに拡散。列島と琉球には4-3万年前頃までに到達。列島に渡った人は縄文人の祖先

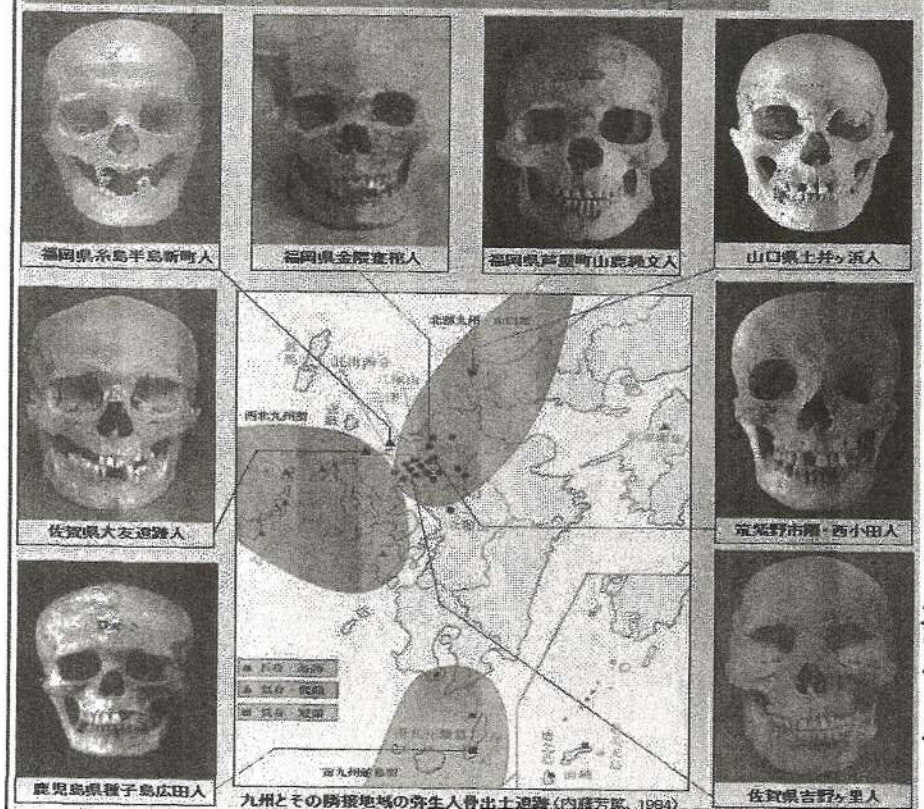
⑤また北東アジアに進んだ人の中には、沿海州からサハリンを抜け北海道に渡った人も

⑥シベリヤに向かった人々は、遅くとも2万年前頃までにバイカル湖付近に到達し、寒冷化適応して北方アジア人の特徴を獲得。この集団はその後、南下・東進し3000年前頃までに中国東北部、朝鮮半島、黄河流域、江南地域などに住み着いた

⑦この中国東北部から江南地域にかけて住んでいた人々の一部が縄文時代の終わり頃に朝鮮半島経由で西日本に渡来

⑧西日本から日本列島に拡散

∴縄文人：南方起源
　彫りが深い顔
弥生人：北方起源
　のっぺりした長い顔

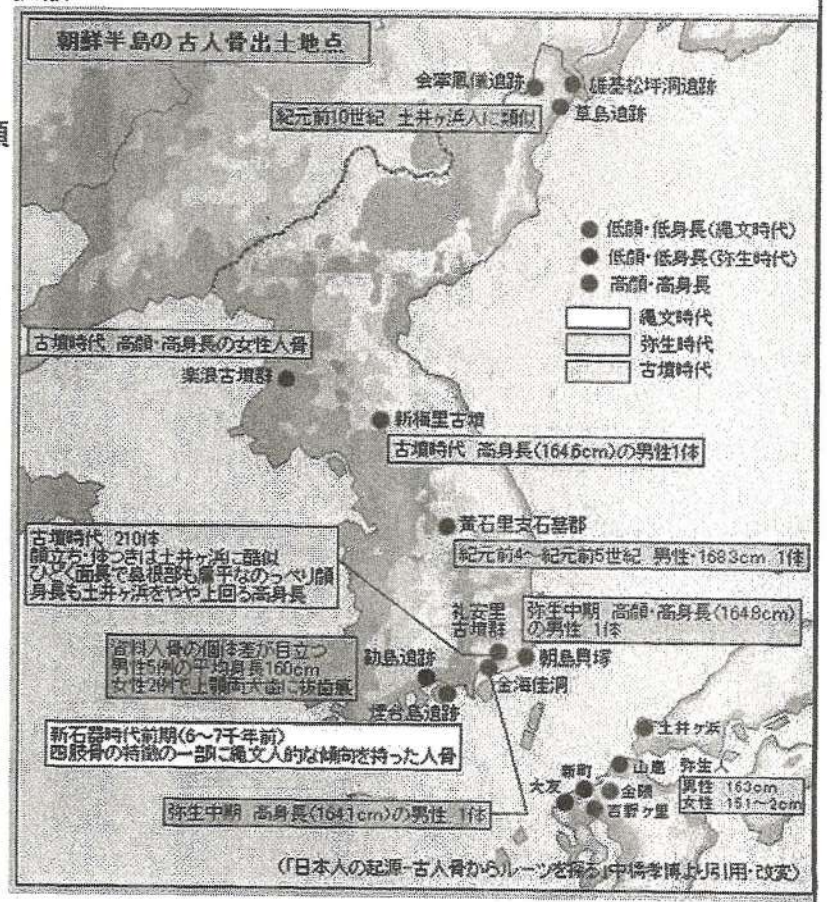


<頭蓋骨の7つの計測値の分析結果>

●西日本弥生人の男性は、中央アジア人、北アジア人に酷似

●西日本弥生人の女性は、西日本の縄文人に似ている

●東日本の弥生人（男女）は西日本弥生人と東日本縄文人との両方の特徴



<土井ヶ浜遺跡の弥生人たち>

一殷周時代の青海省の古人骨

一戦国時代末一漢代の山東省 臨淄の人に酷似

2.新たな民族の進入：渡来系弥生人

The Arrival of New Peoples: The Yayoi Immigrants from Mainland Asia

松村博文 Hirofumi Matsumura

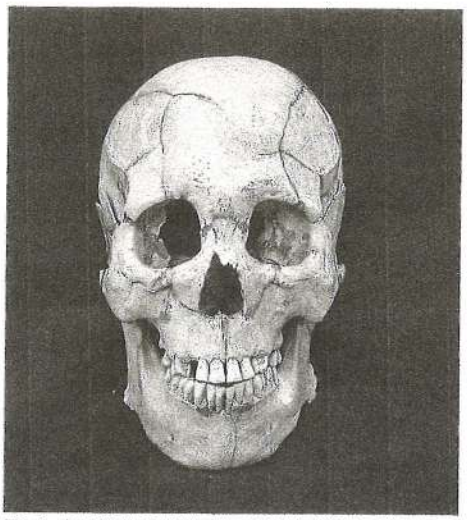


図5-8　山口県土井ヶ浜遺跡から出土した渡来系弥生人男性頭骨
Cranium of male Yayoi immigrant, found at Doigahama site, Yamaguchi Prefecture

時代は変わって、紀元前300年頃、あるいはそれよりもう少し前頃から、大陸方面から西日本に伝えられてきた稲作農業と金属器の文化は急速に東日本にも広がり、人々の生活は大きく変化した。それまで狩猟採集中心の生活を営んでいた縄文時代の人々も、早くから陸稲を細々と栽培していたことがわかっているが、本格的な水田をつくって水稲を耕作するようになったのは弥生時代になってからである。この頃、北部九州や山陰地方には縄文人とは全く異なったタイプの人々が現れた。渡来系弥生人と呼ばれる人々だ。

渡来系弥生人の姿

渡来系とみられる弥生人の骨が最初にみつかったのは、山口県の日本海に面する土井ヶ浜遺跡である。その容貌は、これまでの縄文人とは似ても似つかぬものであった。頭骨のかたちをみてみると(図5-8)、縄文人とは対称的に、顔の骨は上下に長く、鼻の付け根は縄文人のようにくぼんでおらず、鼻の骨も平べったくなっている(図5-9)。眼球の収まる眼窩は、縄文人のように角張らず円くなっている。渡来系弥生人の顔は、面長でのっぺりとした顔立ちである(図5-10)。まぶたの脂肪はよく発達していて、目は細く、くちびるも薄く、髭などの体毛も少なかったと想像される。また、口元をみると、縄文人よりも少し前歯が出っ張っているのがわかる。歯が大きいのだ。縄文人はスンダドントと呼ばれる小さく単純なかたちの歯をもつのに対して、渡来系弥生人はシノドントと呼ばれる大きく複雑なかたちの歯をもっている。体全体の大きさやプロポーションも対照的である。渡来系弥生人の平均身長は、男性が164cm、女性が150cmほどあり、縄文人(男性平均：158cm、女性平均：147cm)よりもかなり高い。体のプロポーションは、縄文人とくらべると肘から先や膝から下の部分が相対的に短い。このような顔や身体の特徴は、大陸の人々にもみられる。土井ヶ浜遺跡の弥生人が大陸から渡来してきた人々であったことは、ほぼまちがいないであろう。その後、北部九州をはじめ各地の遺跡からも、同じ様なのっぺり顔で高身長の渡来系弥生人が続々とみつかった。

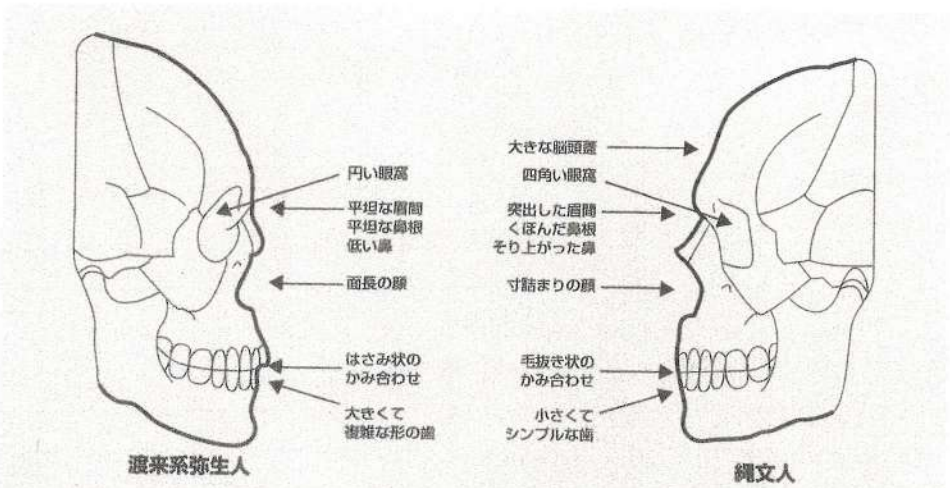


図5-9　縄文人と渡来系弥生人の頭骨横顔
Facial profiles of a Jomonese (right) and Yayoi immigrant (left)

渡来系弥生人の広がり

縄文時代の終わりには、すでに日本にも水田稲作が伝わっていたが、大陸から渡来民が大勢やってくるようになったのは弥生時代の中頃(紀元前後)になってからである。だが弥生時代の遺跡からみつかっている人骨の全てが、のっぺり顔の渡来系弥生人というわけではない。弥生人の骨がたくさんみつかっている九州でも、渡来系弥生人の骨が埋まっていた遺跡は、福岡平野や佐賀平野など広い平地のあるところ、すなわち水田稲作に適した地域に集中している(図5-12)。九州の西北部、長崎県や五島列島など、稲作にあまり適さない山間部や、伝統的な漁労を続けていたと考えられる海岸部の遺跡からみつかっている弥生人は、縄文人そっくりである。つまり、弥生時代になっても、これらの地域では縄文人の子孫たち、いわゆる在来系弥生人が住み続けていたのだ。

では北部九州や山陰地方に忽然と姿を現した渡来系弥生人は、日本列島の東のほうでは、どこまで広がっていたのであろうか。果たして当時の東日本にもきていたのであろうか。近畿から東海地方の遺跡からは、わりと保存のよい弥生人の骨がみつかっている(図5-13)。奈良県の唐古・鍵遺跡や愛知県の朝日遺跡などである。これらの遺跡から発見されている人骨はどれも皆、高身長での

図5-10　渡来系弥生人の復元想像図
（左：男性、右：女性／イラスト：石井礼子）
Reconstructed faces of Yayoi immigrants
(left: male, right: female)

っぺり顔の弥生人、すなわち渡来系弥生人である。兵庫県の新方遺跡からは、弥生時代の初めの頃の人骨がみつかっており、そのタイプは在来系の弥生人であるという。さらに東はというと、弥生人の骨はみつかってはいるのだが、あまり保存はよくない。まともに顔面が残っていない頭骨や、かろうじて歯しか残っていない遺跡がほとんどだ。このような人骨のかけらや歯のかたちから推測すると、少なくとも関東西部の三浦半島のあたりや、長野県にも渡来系弥生人がきていたらしいことがわかっている。一方、千葉県の房総半島や群馬県や福島県あたりの遺跡からは、わりと保存のよい頭骨がいくつか発見されているが、どれも縄文顔の弥生人、つまり在来系弥生人である。今のところ東北地方からは、弥生人がほとんどみつかっていない。岩手県にあるアバクチ洞穴から、1体の子供の人骨がみつかっているのが唯一の例である。この人骨には縄文人的特徴と渡来系弥生人の特徴が入り混じっているそうだ。北海道からは、噴火湾沿岸の虻田町にある礼文華貝塚に渡来系弥生人と縄文人の特徴を合わせもつ人骨が1体みつかっている。東北地方や北海道にも数は少ないながらも、渡来系弥生人がきていたのかもしれない。

◎コラム8

［渡来民の顔はなぜ平べったい］

Why the Immigrant's Face is Flat ?

それは渡来民の祖先が2万年前の氷河期のまっただ中を生き抜いてきたからにほかならない。人類は熱帯で生まれ、やがて寒冷な気候に適応していった。しかし、シベリアの零下50度にもなる厳寒の気候に適応できたのは、わずか2万年ほど前のことである。このような厳寒の気候に曝された人々は、身体も顔も革新させていった。体温の発散を防ぐために、身体はずんぐりし手足は短くなった（図5-11）。とくに、腕や脚の末端近くが短くなった。顔の凍傷を防ぐために、鼻は低くなり、まぶたは厚く一重になった。眉や髭も少なくなったと考えられている。吐く息が口のまわりに凍り付いて困るからだ。このように本格的な寒冷気候に適応したアジア人を私たちは北方アジア人と呼んでいる。やがて5000年ほど前、この北方アジア人がシベリアから拡大し始めた。彼らは、中国北部で農耕技術を学び、北東アジアの大部分に広まっていった。かつてはスンダランド由来の人々が住んでいた東アジアの大部分が、後から移住してきた北方アジア人によって奪われてしまったのである。2000年前頃には、中国南部の水田稲作技術とともに日本列島にやってきた、すなわち、[illegible]弥生時代を切り開いた渡来民、いわゆる[illegible]弥生人だったのである。（松村博文）

図5-11　寒冷地適応した北方アジア人
（イラスト：石井礼子）
Northern Asian adapted to cold climate

14．渡来人の原郷

私たち日本人の基礎を形づくる上で大きな役割を果たしたと考えられる弥生時代の渡来人とは，いったいアジア大陸のどのあたりからやってきたのでしょうか。

この問題を解くためには，その当時の大陸側の古人骨資料を調べて，日本の弥生人と似た特徴のあるものを探せばよいのですが，これがそう簡単なことではありません。土地の広大な大陸側では人骨の発見される機会は日本ほど多くはありませんし，それに人類学を専攻する研究者の数も少ないからです。

北部九州でまとまった数の弥生人骨が発見され始めた当時は，弥生時代に相当する時期の古人骨資料が大陸側ではほとんど見つかっていませんでしたので，弥生人の推定身長をたよりに，渡来人の故郷を朝鮮半島の南部あたりと推測しておりました。この推測はその後，韓国の釜山に近い禮安里（イェアンリ）遺跡で，渡来系弥生人によく似た古墳時代人骨がまとまって発見されて，裏づけられました。

その後，シベリアや中国北部の新石器時代や青銅器時代の人骨について計測値の報告例がしだいに増えてきて，これらが日本の渡来系弥生人骨とかなり似ていることがわかってきたため，具体的な原郷は突き止められないまでも，少なくとも大もとはアジア大陸の北部にあったのではないかという考えが強くなりました。たしかに弥生人骨の特徴（身長が高く，顔がおもながで平たいなど）には大陸の北方モンゴロイドと共通する点が多いのですが，ではなぜ北アジアの人びとが江南起源の水田稲作をもってきたのか，という疑問がありました。

実は中国の江南地方は，北方の黄河流域以北とは土壌の性質が異なり，骨類の保存に適しないところなのです。この地域でも近年は発掘調査がさかんにおこなわれて，先史時代や古代の墓の発見例もふえており，石器や玉器や，土器，青銅器などはたくさん見つかっているのですが，人骨だけは残りがわるく，形を保ったまま取りあげられる例はごく稀でした。しかも中国では人類学の研究者が少ないため，研究の重点が紀元前2000年以前の新石器時代と旧石器時代の人骨に置かれており，弥生時代の始まりに近い紀元前一千年紀の後半（春秋・戦国・秦漢時代）などは，中国の歴史では新しすぎて，人骨資料の収集には注意があまり及んでいませんでした。

しかし，日本の研究者の要望もあって，最近では比較的新しい時代の人骨にも注意が向けられるようになり，資料が少しずつ増えてきています。

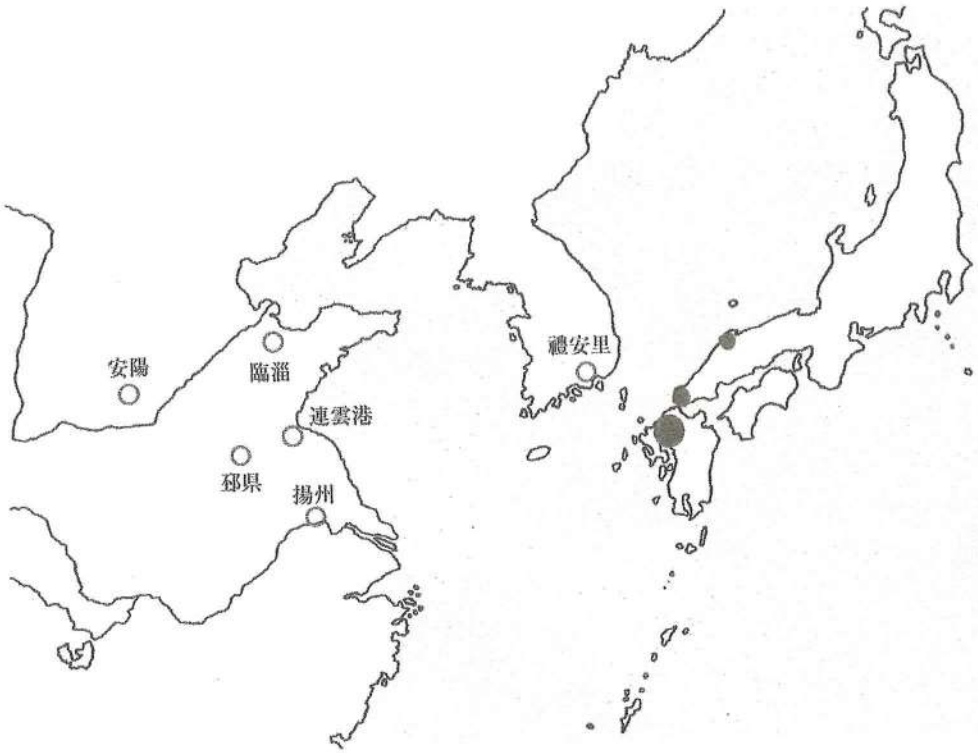
こうしてまず，山東省の臨淄（リンヅ）の春秋時代から漢代にかけての遺跡でかなりの数の人骨が発掘され，日中共同の研究がおこなわれて，これらが日本の渡来系弥生人の骨にきわめて近い特徴をもっていることが明らかにされました。稲作文化の伝来については，考古学の研究から，江南地方に発してしだいに北上し，山東半島に至って黄海をわたり，朝鮮半島と日本列島に伝わった，というコースが有力視されていましたので，人類学のほうでも朝鮮半島南部から中国大陸の山東半島までたどることができたのは，たいへん画期的な出来事でした。

さらに続いて，山東省の南に接する江蘇省でも古人骨の共同研究がおこなわれ，淮河と長江（揚子江）の下流域の春秋時代から前漢の時期にかけての人骨も，ほぼ同じように弥生人骨に類似することがわかりました。資料の数はまだ十分とはいえませんが，それでも成人男女ほぼ20体分が調査でき，通常の人類学的な計測，観察だけでなく，DNAを抽出するための試料も採取することができました。

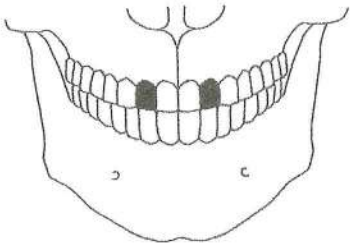
古人骨の場合は核のDNAよりもミトコンドリアDNAのほうが残存している確率が高いので，こちらのほうがよく研究されていますが，今回の研究で抽出に成功した182対の塩基配列13例のうち，３例の配列が九州の渡来系弥生人にみられる配列と一致することがわかりました。この３体の人骨は春秋時代の遺跡から出たものですが，このうちの２体の出た江蘇省北部の邳県梁王城（ピーシェンリャンワンチョン）遺跡では，山口県の渡来系弥生人に見られるのと同じ形式の抜歯（上顎の左右の第２切歯を抜く様式）のある人骨も見つかりました。

春秋時代から戦国時代にかけてのこの地域は，呉越の争乱など，激動のさなかにありましたので，沿岸の住民の一部が戦禍を逃れ，海を渡って新天地に活路を求めたということも大いに考えられます。

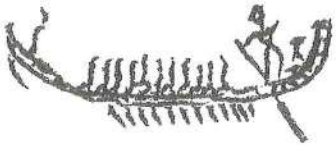
弥生文化の中には，磨製石器や青銅製武器などのような朝鮮半島系の文化要素が少なくありませんが，そのほかに，イネをはじめ竪杵（たてぎね）や高床倉庫のような江南起源と考えられる文化要素も含まれていますので，渡来人の原郷探しは，長江下流域まで視野に入れながら進めてゆくことが必要だと思われます。

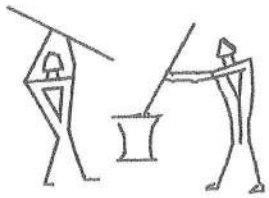


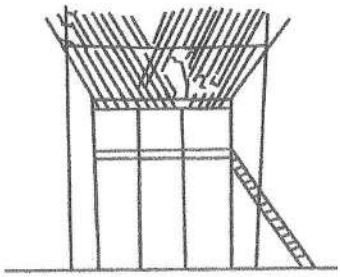
渡来系弥生人に似た人骨の発見地（○）（●はおもな渡来系弥生人骨の出土地）



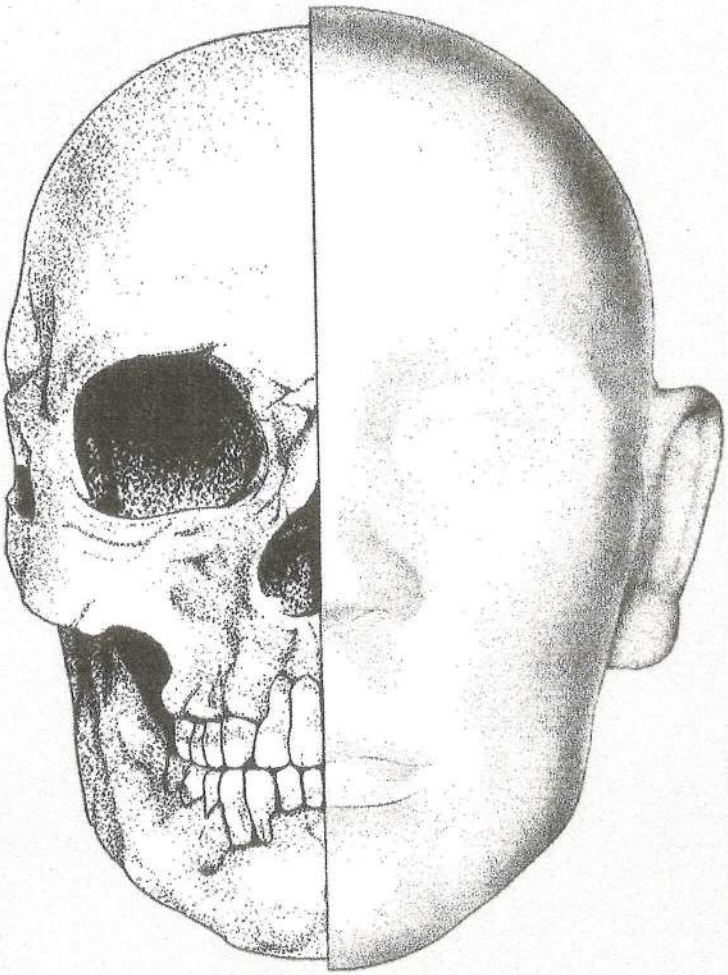
中国の春秋時代人と弥生人に共通する抜歯形式
—上あごの左右の第２切歯を抜く—







銅鐸に描かれた船，竪杵と臼，高床の倉庫



渡来系弥生人の復顔

角島灯台

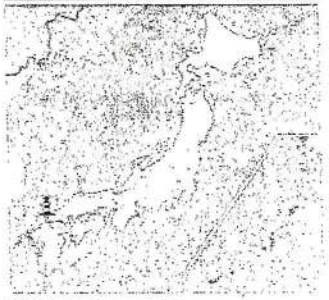
出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

角島灯台(つのしまとうだい)は、日本海(響灘)に浮かぶ山口県下関市の角島の北西端、夢ケ崎に立つ石造の灯台。灯塔は総御影石造りで、日本に2基しかない無塗装の灯台の一つ(もう一つは男木島灯台)。

「灯台の父」と呼ばれるリチャード・ヘンリー・ブラントンの設計による最後の灯台で、日本海では初めての洋式灯台。レンズは日本でも6箇所しかない特大のフレネルレンズで、第1等灯台に指定されている。

この灯台は、歴史的文化財的価値が高いAランクの保存灯台で、日本の灯台50選にも選ばれている。北長門海岸国定公園内に含まれ、灯台周辺は下関市立の角島灯台公園となっている。灯台守の宿舎であった退息所が復元され資料館となり、参観灯台として常時内部が一般公開されている。

角島灯台



航路標識番号	0715[F7397]
位置	北緯34度21分09秒 東経130度50分28秒
所在地	山口県下関市豊北町大字角島
塗色・構造	無塗装、塔形、石造(花崗岩)
レンズ	第1等フレネル式レンズ
灯質	単閃白光 毎5秒に1閃光 Fl W5s
実効光度	閃光 670,000 cd
光達距離	閃光 18.5海里(約34km)
明弧	全度
塔高	29.62 m (地上 - 塔頂)
灯火標高	44.66 m (平均海面 - 灯火)
初点灯	1876年(明治9年)3月1日
管轄	海上保安庁第七管区海上保安本部(下関海上保安署)

目次

- 1 歴史
- 2 その他
- 3 収録海図
- 4 脚注
- 5 外部リンク

歴史

- 1876年(明治9年)3月1日に石油灯で初点灯
- 1932年(昭和7年)9月 灯質を毎5秒1閃光に変更
- 1947年(昭和22年)4月 商用電源化、光源を1500W 電球に変更
- 1966年(昭和41年)4月 集約管理により萩航路標識事務所が管理(滞在勤務)
- 1986年(昭和61年)4月 滞在勤務廃止・巡回による保守点検に変更(無人化)
- 2001年(平成13年)4月 一般参観開始
- 2004年(平成16年)4月 門司海上保安部管理に移管[1]

この節は執筆中です。加筆、訂正して下さる協力者を求めています。

日没とともに作動する角島灯台

角島灯台(遠景)

その他

- 北北西の国石(くんぜ)岩礁を照らすクヅ瀬照射灯 (0716) を併設している。

収録海図

海図番号	図名	縮尺	図積
W115	油谷港付近	35,000	1/2
W149	角島至大社港	200,000	全

脚注

1. ^ 角島灯台 (http://www.kaiho.mlit.go.jp/07kanku/gyoumu/kaiko/toudai/toudaimeguri/setumei/tunosima/framepage4.htm) 第七管区海上保安本部

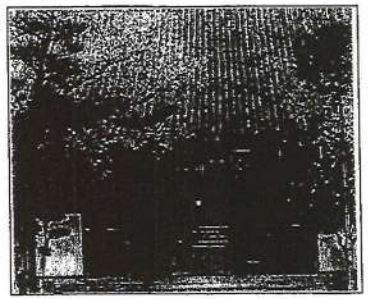
外部リンク

- 概要 (http://www.kaiho.mlit.go.jp/07kanku/gyoumu/kaiko/toudai/meijiki/tunosima2.htm) 、写真 (http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN7/toudai/toudai-pic/tunosima.jpg) - 海上保安庁第七管区海上保安本部
- 概要 (http://www.tokokai.org/archive/history/12.html) 、ペーパークラフト (http://www.tokokai.org/archive/craft/PDF_paper-craft/001-050/P047_tunosima.pdf) (PDF) - 燈光会
- 角島灯台公園の設置等に関する条例 (http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/reiki/reiki_honbun/ar14705491.html) - 下関市

「http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=角島灯台&oldid=44247986」から取得
カテゴリ: 日本の灯台　日本の灯台50選　参観灯台　保存灯台　第1等灯台　下関市の建築物

紫津浦山 極楽寺

延暦3年（784）紫津浦の海底より引き揚げられた霊仏を本尊とする。元治元年（1141）青海島の商人部落へ安置され光明寺と号していたが元暦の頃（1187）源平の兵火で本堂等焼失、建長3年に仙崎に移し道成寺と号す。正嘉年中本堂焼失、文永4年再建永仁元年（1293）長門探題北条信濃守資平が北条重時公追善の為、1寺創建、重時公の法号にちなみ道成寺を極楽寺とす。文亀2年（1502）智弁上人により浄土宗となる。以後再三に亘り兵火大火等で堂宇や古記録等焼失す。現在地は寛文4年毛利公より拝領現本堂は昭和31年の建立なり。



紫津浦山　宝池院　極楽寺

住所:	〒759-4106　山口県長門市仙崎1504番地の1		
TEL:	0837-26-3671	FAX:	0837-26-5051
URL:	——	E-mail:	——

金子みすゞ

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

金子 みすゞ（かねこ みすず、1903年（明治36年）4月11日 - 1930年（昭和5年）3月10日）は、大正時代末期から昭和時代初期にかけて活躍した童謡詩人。本名、金子テル（かねこ テル）。

大正末期から昭和初期にかけて、26歳の若さでこの世を去るまでに512編もの詩を綴ったとされる。1923年（大正12年）9月に『童話』『婦人倶楽部』『婦人画報』『金の星』の4誌に一斉に詩が掲載され、西條八十からは若き童謡詩人の中の巨星と賞賛された。

金子みすゞ
（かねこ みすず）

ペンネーム	金子みすゞ（かねこ みすず）
誕生	金子テル（かねこ テル） 1903年4月11日 ● 山口県大津郡仙崎村（現長門市仙崎）
死没	1930年3月10日（満26歳没）
職業	詩人
最終学歴	郡立大津高等女学校（現・山口県立大津緑洋高等学校）
活動期間	- 1930年
ジャンル	童謡
代表作	『わたしと小鳥とすずと』 『大漁』
子供	娘1人

ウィキポータル 文学

目次

- 1 生涯
- 2 作品
- 3 忘却と再発見
- 4 音楽化と詩の広まり
- 5 著作権について
- 6 関連作品
- 7 脚注
- 8 関連項目
- 9 外部リンク

生涯

山口県大津郡仙崎村（現・長門市仙崎）出身。郡立大津高等女学校（現・山口県立大津緑洋高等学校）卒業。父・庄之助は、妻（みすゞの母）の妹の嫁ぎ先である下関の書店・上山文英堂の清国営口支店長だったが、1906年（明治39年）2月10日、みすゞが3歳のときに清国で不慮の死[1]をとげる。劇団若草の創始者である上山雅輔（本名：上山正祐）は彼女の実弟であるが、幼くして母の妹（みすゞにとっては叔母）の嫁ぎ先である上山家に養子に出されている。叔母の死後、雅輔の養父・上山松蔵とみすゞの母が再婚したため、みすゞも下関に移り住む。同時に、みすゞと雅輔は実の姉弟でありつつ、義理の姉弟の関係となる。

1926年（大正15年）、叔父松蔵の経営する上山文英堂の番頭格の男性・宮本啓喜と結婚し、娘を1人もうける。しかし、夫は正祐との不仲から、次第に叔父に冷遇されるようになり、女性問題を原因に上山文英堂を追われることとなる。みすゞは夫に従ったものの、自暴自棄になった夫の放蕩は収まらず、後ろめたさからかみすゞに詩の投稿、詩人仲間との文通を禁じた。さらにみすゞに淋病を感染させるなどした事から1930年（昭和5年）2月に正式な離婚が決まった（手続き上は成立していない）。みすゞは、せめて娘を

手元で育てたいと要求し、夫も一度は受け入れたが、すぐに考えを翻し、娘の親権を強硬に要求。夫への抵抗心から同年3月10日、みすゞは、娘を自分の母に託すことを懇願する遺書を遺し服毒自殺[2]、26年の短い生涯を閉じた。

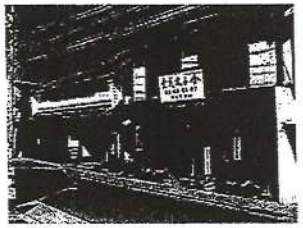
作品

代表作には「わたしと小鳥とすずと」や「大漁」などがある。

仙崎は古くから捕鯨で成り立っていた漁師の村であった。鯨に対する畏敬の念から鯨墓が存在する。金子みすゞは鯨の供養のために、鯨法会をする地域の慣わしに感銘し「鯨法会」という作品を書いている。自然とともに生き、小さないのちを慈しむ思い、いのちなきものへの優しいまなざしが、金子みすゞの詩集の原点とも言われ、「お魚」「大漁」などに繋がっている。

忘却と再発見

金子みすゞの詩は長らく忘れられていたが、岩波文庫『日本童謡集』の「大漁」を読んだ詩人の矢崎節夫らの努力で遺稿集が発掘され、1984年に出版されるや、瞬く間に有名になった。現在では代表作「わたしと小鳥とすずと」が小学校の国語教科書に採用されている。東京大学の国語の入試問題(1985年国語第二問)に採用された作品もある。また、このことをきっかけに地元長門でもみすゞの再評価が行われることとなり、みすゞの生誕100年目にあたる2003年4月11日には生家跡に金子みすゞ記念館が開館。みすゞが少女期を過ごした家を復元すると共に、直筆の詩作のメモなどが展示されている。


生家跡に建てられた金子みすゞ記念館

また、長周新聞によると、かつて長周新聞の主幹であった福田正義が矢崎をはるかに遡る1937年、雑誌『話の関門』の中で金子みすゞの生涯と作品を紹介したとしている[3]。ただし、当時の福田の紹介は地元(下関)の雑誌で掲載されたものであり、後の矢崎の紹介ほど広く知らしめるには至らなかった。

音楽化と詩の広まり

みすゞの詩は元々曲をつけられることを想定したものではなかったが、詩作への評価の広まりと共に、童謡・歌曲・合唱曲として中田喜直、池辺晋一郎、吉岡しげ美、李政美、沢知恵、野田淳子、もりいさむ、石若雅弥を初めとする作曲家や歌手によって広く作曲されている。西村直記、大西進のように、全ての詩に付曲した者もいる。2006年12月には「わたしと小鳥と鈴と」の詩に、作曲家の杉本竜一が曲を作り、テノール歌手新垣勉がアルバム「日本を歌う」内で発表している。この楽曲は、その年のNHK「みんなのうた」でも放送された。またピアニスト・作曲家の小原孝は、2006年、第17回奏楽堂日本歌曲コンクールにおいて「こぶとり～おはなしのうたの一」に作曲し、中田喜直賞を受賞。これを機会に「おはなしのうた」連作5編にすべて作曲している。数々のヒット歌謡の作曲家である浜圭介は、盟友大津あきらの墓所を訪れたことをきっかけにみすゞを知り、その壮大な世界観をフルオーケストラで表現したいと、8編に作曲。編曲・服部隆之、指揮・佐渡裕、演奏・新日本フィルハーモニー交響楽団、テノール・佐野成宏、ソプラノ・佐藤しのぶという豪華メンバーでのレコーディングを経て、CD「みすゞのうた—金子みすゞmeets浜圭介」(エイベックス・クラシックス)をリリースしている。

また、金子みすゞと同じ故郷山口県出身の歌手・作曲家ちひろは、金子みすゞの詩の50編近くに作曲し歌っており、「私と小鳥と鈴と」「星とたんぽぽ」は、歌集「さあ歌おう(山口県版)」に掲載される。CDアルバムも6枚リリースしている。

パーソナリティをちひろが務めたエフエム山口制作特別番組「こだまでしょうか～今、金子みすゞの心を聴きたい～」は第7回日本放送文化大賞ラジオ部門の準グランプリを受賞し全国放送される。随所にちひろが作曲し歌う曲が紹介され、矢崎節夫氏や上村ふさえ氏のインタビューを交え、長門市通地区にある向岸寺「鯨法会」(鯨回向)の様子も紹介されている。

株式会社シマヤの商品「金子みすゞの子守唄で寝かせた味噌」の熟成段階で、ちひろが歌う「波の子守唄」が起用され、その模様がメディアに数多く紹介されている。

東隆明脚本・演出による「こだまでせうか～童謡詩人・金子みすゞ　その愛と死～」は七人の作曲家によって「鯨法会」「葉っぱの赤ちゃん」など25曲に付曲し、語り朗読でみすゞの詞と人生を綴り、日本クラウンからCD発売され、また舞台化もされた。

NHK Eテレの子供向け番組「にほんごであそぼ」では、狂言として野村萬斎がアレンジした「大漁」が、番組内での歌として「私と小鳥と鈴と」が使用されているほか、みすゞの詩のフレーズを題材にした回も複数製作されている。

他に山口県出身のもりいさむも金子みすゞの詩に80編近く作曲し、1985年からみすゞのうたを歌い続けている。もりいさむが作曲した「私と小鳥と鈴と」は金子みすゞの母校である長門市立仙崎小学校で第二校歌として歌われている。

メディアへの露出としては、ラジオ大阪「1314 V-STATION」の携帯サイト「声優V-STATION」3分ラジオで2003年6月19日～2004年1月5日に金子みすゞの詩を朗読するプログラム「小森まなみのおやすみポエム」が公開され、後にCD化された。TBSラジオのミニ番組「童謡詩人・金子みすゞ」でも詩作の朗読が放送されていた。

みすゞの作品の一つ「こだまでしょうか」を取り上げたACジャパンのCM(歌手・UAによる朗読)が、東北地方太平洋沖地震に伴うCM差し替えにより多く露出したことにより「金子みすゞ全集」の売り上げが伸び、地震の影響で重版が困難なことから『金子みすゞ童謡集「こだまでしょうか」』として急遽電子書籍化されるなどの広まりが見られる。また、「こだまでしょうか」独特の語調をパロディにした作品がインターネット上で広まるなどの話題を呼んでいる[4]。

2003年に開館した金子みすゞ記念館の入場者数が2011年5月に100万人を突破した[5]。

著作権について

金子みすゞの作品そのものの著作権は作者であるみすゞの死後50年を過ぎており消滅しているが(著作権の保護期間参照)、作品集を出版しているJULA出版局を窓口とする「金子みすゞ著作保存会」[6]は、みすゞ作品を利用する際には同会の許可を得るよう求めている。その理由としてJULA出版局は、著作の大半が生前未発表であったこと、ならびに未発表作品を一般に広めるきっかけとなった『金子みすゞ全集』(JULA出版局)による二次的著作権の存続を挙げている。このこともあり、みすゞ作品は青空文庫にも収録されていない[7]。この点には、矢崎らの「金子みすゞ著作保存会」の姿勢に対して疑念を持つ者も存在し、福田による紹介を取り上げた長周新聞も、著作を独占しているとして矢崎を記事内で批判している[8]。

関連作品

また、みすゞの数奇な人生は後に映画・テレビドラマ・舞台などで演じられており、劇中で詩作が紹介されることも少なくない。

映画

- 「みすゞ」(紀伊國屋書店制作、監督:五十嵐匠、主演:田中美里)、2001年。

ドラマ

- NHKスペシャル「こころの王国・童謡詩人金子みすゞの世界」(NHK制作、演出:今野勉、主演:小林綾子)、1995年。
- 「明るいほうへ 明るいほうへ」(TBS制作、プロテューサー:石井ふく子、主演:松たか子)、2001年。
- 「金子みすゞ物語～みんなちがってみんないい～」(TBS制作、プロテューサー:石井ふく子、主演:上戸彩)、2012年。

舞台

- 「空のかあさま」(作:大薮郁子、演出:石井ふく子、主演:斉藤由貴)、2001年。
- 「私の金子みすゞ」(演出:小森美巳、主演:高橋理恵子)、2002年、2004年。
- 「空のかあさま」(作:大薮郁子、演出:石井ふく子、主演:藤田朋子)、2003年。
- 「金子みすゞ 最期の写真館」(作・演出:早坂暁、主演:小野山千鶴)、2005年
- 「みすゞとテルと母さまと」(台本・総合演出:鈴木理雄、演出:小笠原響、主演:純名りさ)、2007年。
- 「金子みすゞ いのちへのまなざし～詩と歌と物語～」(主演:保谷果菜子)

漫画

- 「ゼロ THE MAN OF THE CREATION」の第263話(単行本第41巻収録)「薄幸の童謡詩人・金子みすゞ」にてかなり詳しい心情・実情等も取り上げられている。

講談

- 「金子みすゞの伝」(作:一龍斎春水、口演:一龍斎春水 http://yokoharumi.com 、2007年より継続)

脚注

1. ^ 以前は中国人に殺されたという他殺説が通説だったが、近年は急性脳溢血説が有力である(読売新聞2006年(平成18年)4月20日「薄幸の詩人・金子みすゞ 父の他殺説覆す記事」参照)。
2. ^ 矢崎節夫著の『金子みすゞ童謡集』によればカルモチンを服用したとされる。
3. ^『話の関門』を探し出そう (http://www.h5.dion.ne.jp/~chosyu/hanasinokanmonwosagasidasou.htm) 参照。自殺当時のマスコミの扱いや遺族についても詳しい。
4. ^ こだまでしょうか、いいえ... (http://sankei.jp.msn.com/economy/news/110404/its11040415050000-n1.htm) - MSN産経ニュース2011年4月4日
5. ^ 2011年5月10日付産経新聞夕刊11面
6. ^「金子みすゞ著作保存会」には作品の紹介に貢献した矢崎の他に、みすゞの実子(娘)も関わっている。保存会設立の主旨については『文藝別冊 総特集 金子みすゞ 没後70年』(河出書房、2000年)所収の、みすゞの実子へのインタビュー記事「母のこと、そして詩人みすゞのこと」(聞き手 矢崎節夫)に詳しい。
7. ^ 青空文庫公式サイト (http://www.aozora.gr.jp/siryo1.html#ka) では、「作者の死後、関係者の努力によって発掘された経緯を踏まえ、取り組むか否か検討中」としている。
8. ^ 長周新聞の記事"『話の関門』を探し出そう"に記述あり。矢崎ではなく福田を第一発見者と主張する趣旨の記事だが、矢崎の姿勢そのものに対して「大きなもうけのため」としており、反資本主義的な見地からの批判を含んだ内容となっている。

関連項目

- 捕鯨文化 - 実際の鯨墓と鯨法会について記載。
- みすゞこれくしょん - みすゞをモチーフとしたキャラクター。
- みすゞ潮彩 - みすゞの住んでいた下関と仙崎を結ぶ観光列車。愛称はみすゞにちなんだもの。
- 金子みすゞ (小惑星) - 1995年に発見された小惑星。みすゞにちなんで命名された。
- 仙崎郵便局 - 金子みすゞ記念館の斜め向かいに位置する。2代目局舎が「郵便局の椿 (http://www.geocities.co.jp/Bookend-Hemingway/5778/tubaki.htm) 」に詠われた。現在の局舎は3代目。

外部リンク

- 金子みすゞ記念館 (http://www.city.nagato.yamaguchi.jp/misuzu/index.html)

八坂神社

長門市仙崎祇園町1339(平成20年7月30日)

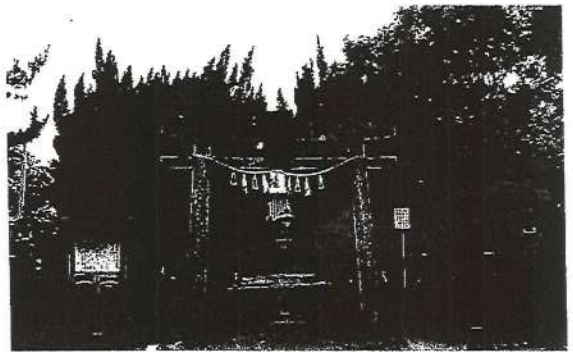
東経131度12分09.78秒、北緯34度23分12.86秒に鎮座。 Mapion

この神社は、山陰本線・仙崎線終点の仙崎駅の北200m程の辺り、先崎港の西側に鎮座しております。地名の祇園町から想像出来るように、明治以前は牛頭天皇を祀った祇園社であったと思われます。勿論祭りは「仙崎祇園祭」。笛、太鼓、鉦などの賑やかな祇園囃子が山車で街中に繰り出すようです。

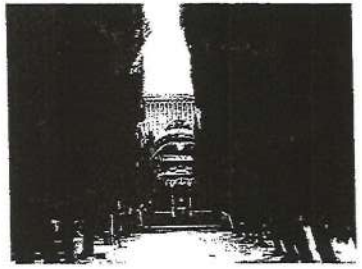
御祭神:素戔嗚命・奇稲田姫命・蛇毒気神

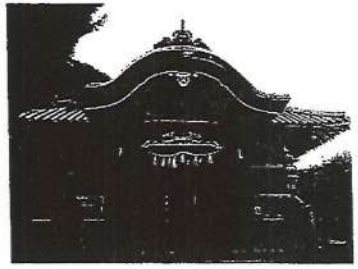
八坂神社は人皇四十四代元正天皇霊亀年中吉備大臣遣唐の砌御祭神の加護により恙なく帰朝の時、船を仙崎港に繋ぎ遺跡を探聞し大いに神徳の著しきを感嘆され、帰京の後、聖武帝吉備公を遣し天平三年三月草神廟を仙崎王子山の絶頂に建立、祇園社と云う。・・・・
境内由緒書より。全文はこちら。
↳ 裏面

神社入り口。鳥居の額には「陽長八坂本宮」と書かれています。



拝殿





拝殿前の狛犬。拡大写真はこちら。

～長州藩（別称・萩藩）について～

藩の歴史

■八か国から二か国への減封

豊臣秀吉の五大老の一人であった毛利輝元は、安芸・周防・長門・石見・備後・出雲・隠岐・伯耆の八か国１１２万石を領する中国地方の大大名だったが、慶長５年（１６００）、関ケ原の戦いで西軍に属して敗れたために、周防・長門二か国に減封された。

毛利家は瀬戸内海側に居城を築くことを希望していたが、幕府は日本海側に面した萩を指定。同９年に萩城が築かれた。輝元は慶長５年に家督を秀就に譲り隠居。しかし、その後も藩の実権を握っていた。

急激な石高の減少は多くの藩士を抱える長州藩の藩財政を直撃した。このため藩組織の改編や徹底した検地などを行って立て直しが計られた。そして、こうした苦しみは幕府の横暴の結果として記憶され、根強い反幕の精神風土をつくりあげたのである。

その一方で一族の者に、長門国長府３万６千石・周防国岩国３万石・同じく徳山３万石を分与して支藩とし、長州本藩の固めとしている。

■人材の養成と産業の振興

藩の置かれた窮状を打開するため、歴代藩主は人材の養成と産業の振興に力を入れた。なかでも特筆されるべきは、藩校「明倫館」の創設と「撫育方」の設置である。

明倫館が創設されたのは享保４年（１７１９）、五代藩主・吉元のときのことであった。これは各藩の藩校のなかでも早い時期のものであり、いかに長州藩が人材育成を重視していたかがわかる。明倫館は形態を変えながらも幕末まで存続し、吉田松陰によって天保１３年（１８４２）に設立された松下村塾とともに、長州藩を歴史の表舞台に押し上げた多くの有能な人物を生み出した（藩庁の山口移転にともない山口にも明倫館が設けられた）。

撫育方は七代藩主重就の時代に設置された。これは、財政難打開のために行った検地で明らかになった新増分４万石を、別会計として特産品の製造や干拓といった事業に運用するというもので、のちの長州藩の豊かな財政の基盤となった。幕末の洋銃購入などもこの撫育金によるもので、長州藩が維新を乗り切れたのも撫育方あってのことだったといえる。

■天保の改革と寛政の改革

撫育方などの財政健全化の努力にもかかわらず、長州藩の借金は増える一方で、天保９年（１８３８）には９万貫を超えるという異常事態となっていた。ここに至って抜本的改革の必要を認識した第十三代藩主・敬親は、村田清風を抜擢して藩政を担わせた。

村田は中級藩士を重用して専売制の改革や軍制の再編といった改革を断行、洋学の採用などを行ったが、反対派のために失脚させられてしまった。しかし、その改革の試みは後年の改革派の登場へと道を開いたのである。

村田のあとを継いで寛政期に改革を行ったのは周布政之助だった。周布は「朝廷に忠節・幕府に信義・祖宗に孝道」という藩是三大綱を標榜する一方で、下層藩士を登用し、農村の復興を目指した。また洋式兵器を導入して軍備の拡充も図った。松下村塾が高杉晋作ら維新の志士を輩出していったのも、この時期のことである。

※村田清風
一七八三～一八五六。長州藩士。天保二年（一八三一）、当役用談役となり藩政改革に取り組むが、反対派によって失脚する。海防に関する著作もある。

明治23年に吉田松陰の実家敷地内に建てた祠が起源といわれる松陰神社の近くにある松下村塾（右）と、8畳の講義部屋。松陰が講義をしたのは２年半。

一八三〇～一八五九。長州藩士。江戸で佐久間象山らに師事。藩に無許可で東北地方を遊歩したことが亡命とみなされ士籍を除かれる。ペーリー再来航に際して密航を企てるが失敗し、実家に幽閉される。この間、松下村塾で高杉晋作ら長州藩の逸材を教育するが、安政の大獄により刑死。

※松下村塾
吉田松陰の私塾。長州藩の尊王攘夷派の拠点として、高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤博文・山県有朋・井上馨らを輩出した。

幕末の動向

■航海遠略策の挫折

嘉永６年（１８５３）のペリー来航に端を発する一連の騒動、すなわちアメリカの通商要求、伊井直弼による勅許なしの日米修好通商条約調印、安政の大獄、桜田門外の変は、盤石と思われていた幕藩体制を揺るがすものであった。とくに大老の江戸城前での暗殺は、幕府の威信を大きく失墜させた。

これを機に各地の雄藩は幕政への関与を強め、その主導権を握るためにさまざまな工作が行われていった。さらには中下層藩士たちの改革運動も活発化させた。こうした動きは、開国と攘夷、勤王と佐幕という二つの路線対立を意識的に取り込むことによって、より先鋭化していった。

伊井暗殺以降の、この混乱する政局で一歩先んじたのが長州藩であった。文久元年（１８６１）、藩の直目付・長井雅楽（時庸）が、航海遠略策（海外に航海を開いて武威を示すよう朝廷が幕府に命令し、幕府はこれを遵守するというもの）を朝廷と幕府に献策したのである。この策は開国政策に沿うものだったので幕府にとって都合のよいものであったし、朝廷にとっても幕府に命ずる立場になるため面目の立つものであった。

こうして長州藩は、航海遠略策を梃に公武合体（朝廷と幕府を一体化する政策）の主導権を握ったかに見えたが、久坂玄瑞ら藩内攘夷派の台頭と薩摩藩の横槍で失速し、長井は切腹となった。

代わって主流となったのは、薩摩から兵を率いて上洛した島津久光（藩主・忠義の父）の推す公武合体策であったが、久光の江戸下向中に藩論を攘夷で統一した長州藩が巻き返しを行ない、孝明天皇に鎖港攘夷を認めさせた。以降、京では攘夷派の勢力が強くなり、天誅事件が続発することになった。

■八月十八日の政変と禁門の変

文久３年（１８６３）三月、第十四代将軍家茂が上洛。公武合体を進めたい家茂は、５月１０日を期限に攘夷の実施を朝廷に約束してしまった。攘夷の号令は各藩にも通達され、長州藩も外国船から攻撃されやすい萩から山口に藩庁を移すなど、攘夷に向けた準備が進められた（以降、山口藩と称することもある）。

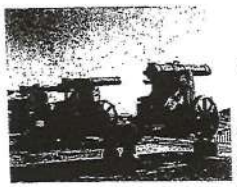
そして攘夷実施期限である５月１０日、長州藩は下関海峡を通過するアメリカ商船およびフランス・ロシアの軍艦に向けて砲撃し、攘夷を実行に移した。しかし、翌日には報復攻撃を受け、下関砲台を占領されてしまう。この敗戦にショックを受けた藩主の敬親は、高杉晋作に新たな軍隊の編成を命じた。こうして結成されたのが奇兵隊である。

一方、京においても長州藩に対する反発が高まっていた。同年８月１８日、会津・薩摩・淀の藩兵が御所の九つの門を閉鎖するなか、長州勢と攘夷派公家を排除して朝議が開かれ、長州藩は堺町御門警衛などの任を解かれた。これによって長州藩は京都から追放の形となり、攘夷派の７人の公家は長州へと亡命した（八月十八日の政変、七卿落ち）。

起死回生を狙った長州藩の急進派は兵を率いて上洛、武力を背景に会津・薩摩を排除しようとした。元治元年（１８６４）７月１８日、朝議での名誉回復が拒否されたことをきっかけに長州軍は攻撃を開始。三方向から御所への突入を計ったが、会津・薩摩・桑名などの藩兵に撃退され、久坂玄瑞らが自刃する結果に終わった（禁門の変、あるいは蛤御門の変）。結果として御所に向かって発砲した長州は朝敵となり、孝明天皇は長州追討令の勅命を出した。

※奇兵隊
文久三年（一八六三）、外国艦船の報復攻撃に危機感を抱いた長州藩が、高杉晋作を起用してつくらせた軍隊組織。隊員は武士と農民・町民が半数ずつを占めていた。奇兵とは正規兵に対する変則があるが、実質的に長州藩の正規軍隊で、第二次幕長戦争や戊辰戦争で活躍した。

※八月一八日の政変、七卿落ち
公武合体を推進する京都守護職松平容保（会津藩）と薩摩藩が行った、長州藩を中心とする尊王攘夷派を京都から追放した事件。文久三年（一八六三）八月一八日に起きたのでこの名で呼ばれる。長州藩兵は御所警備の任を解かれ、三条実美ら尊攘派公卿七人が長州へ逃れた（七卿落ち）。



櫻ノ濱砲台跡近くの「みもすそ川公園」に置かれた当時の長州砲のレプリカ群

■二度目の長州征討と薩長同盟

長州藩の受難はさらに続く。同年８月５日、英・米・仏・蘭の四か国の連合艦隊は、下関の長州藩陣地に向けて総攻撃を加えた。前年に船が砲撃を受けたことの報復であると同時に、関門海峡交通の安全を確保するための行動であった。前年の交戦後、長州藩も砲台の強化を行っていたが火力の差は歴然としており、戦いは三日で決着がつき、外国船への薪水の供与といった講和条約を長州藩は受け入れざるを得なかった。

この敗戦で攘夷が不可能であることが明らかになったことから、藩内の攘夷派・正義党は弾劾され、代わって佐幕的な俗論党が政権を握った。

同じ頃、幕府は長州藩追討の勅命に基づいて、西南２１藩に出兵を命じ、尾張（名古屋）藩主・徳川慶勝（よしかつ）を征長総督とした第一次長州征討軍を派遣した。これに対して佐幕派の俗論党による長州藩政府は、幕府への恭順を示すために奇兵隊などの部隊の解散と、禁門の変を主導した三家老の切腹を約束した。長州藩の態度を諒とした征長軍は、戦闘を行わずに撤兵した。

幕府軍との戦闘は回避できたものの、諸隊の解散などについて藩内の不満は高まり、同年１２月、高杉晋作は俗論党打倒の兵を起こした。これによって藩内は一時内線状態となったが、翌年１月には倒幕派の正義党が政権を掌握した。

藩政権を握った正義党は、木戸孝允・井上馨（かおる）・伊藤博文らを指導者として、表面では幕府に恭順しつつ軍備を備える「武備恭順」の方針で藩の改革を進めていった。

また、坂本竜馬・中岡慎太郎らの斡旋により薩摩（鹿児島）藩との秘密同盟を締結。薩摩藩を通じて兵器を調達した。

一方幕府は、長州藩が藩主の江戸蟄居などを履行していないことなどから、第二次長州征討を決定。しかし、いずれも内政に不安を抱えている各藩は志気が上がらず、密約のある薩摩藩は大義の不在を理由に出兵を断った。

慶応２年（１８６６）６月７日、周防大島への幕府軍の攻撃により戦闘が開始。征長軍は四方向から長州藩を攻撃したため四境戦争とも呼ばれるが、いずれの戦場においても長州軍が優位に戦闘を進めた。

結局、第十四代将軍家茂の大坂城での急死と小倉城の落城により休戦となり、幕府の弱体化を曝け出す結果に終わったのであった。

■王政復古と倒幕の密勅

孝明天皇と将軍家茂の死は、公武合体の可能性を完全に打ち消してしまうものだった。明治天皇の即位により岩倉具視などの倒幕派公家が復権し、朝廷は反幕府色を濃くしていった。

薩摩藩や長州藩などの急進派は武力倒幕へと傾いていったが、天皇をトップに戴いた大名会議によって幕藩体制を建て直そうと考えていた土佐藩主・山内豊信（容堂）らは、家茂のあとを継いだ第十五代将軍慶喜に大政奉還を建白。将軍から諸侯の列に下がることによって、倒幕の名目が失われることに注目した慶喜はこれを受け入れ、慶応３年１０月１２日、二条城二の丸御殿大広間において諸侯に大政奉還を表明した。

慶喜の大政奉還により倒幕態勢が崩れることをおそれた倒幕派は、対抗手段を矢継ぎ早に打っていった。大政奉還とほぼ同時に倒幕の密勅を薩摩藩と長州藩に送ったのに続いて、１２月９日には王政復古の大号令を発したのである。

王政復古はたんに天皇親政を宣言したものではない。将軍や摂政・関白といった旧来の政治制度を全て否定して、天皇を頂点とした新しい政治制度を創るというものであった。さらにその夜に行われた小御所会議では、慶喜の官位と領地の返納も決められた。

こうした倒幕派の強引な行動には諸藩も反発し、慶喜を支持する勢力は武力によって薩摩藩などを排除しようという動きも現れた。しかし、あくまで政治工作での復権を狙った慶喜は、大坂に下って機会を待った。

なお、禁門の変により朝敵の立場にあった長州藩だが、王政復古を前に朝廷より赦しを得、敬親の官位なども旧に復した。

慶喜が大政奉還を諸侯に表明した二条城二の丸御殿

※小御所会議
小御所とは、御所紫宸殿の東北にある内裏内の建物の名。非公式の対面などにつかわれた。この建物で慶応三年（一八六七）一二月九日の王政復古の大号令が出された夜、御前会議が開かれた。新政府三職（総裁・議定・参与）と尾張・福井・広島・土佐・薩摩の各藩重臣が参列。主に徳川家の処分問題が話し合われた。土佐・山内、福井・松平らは徳川慶喜の参加を主張したが、岩倉具視らの武力倒幕派によって慶喜の除官辞退が決定された。

※錦の御旗
錦旗、天皇（朝廷）の軍隊＝官軍を象徴的に表す幟。赤地錦に金糸銀糸の日月をあしらったものなどがある。朝敵討伐戦で官軍の大将に与えられる。承久三年（一二二一）の承久の乱に際して後鳥羽上皇が与えたものが最初という。官軍側の士気を大いに高め、賊軍の戦意を喪失させる効果があったとされる。

■戊辰戦争の勃発

慶喜の政治工作が成功して復権されることをおそれた薩摩藩は、江戸でテロ活動を行って旧幕府を挑発した。これに乗ってしまった江戸警護の庄内藩や出羽松山藩・上山（かみのやま）藩らは薩摩藩邸を襲撃、全焼させてしまった。

薩摩藩邸攻撃の報は大坂にも届き、慶応４年（１８６８）１月３日、ついに旧幕軍と新政府軍の間で戦端が開かれた。世にいう鳥羽・伏見の戦いである。

戦闘は一進一退の様相を呈したが、三日目に新政府軍が錦の御旗を掲げたことにより旧幕軍は賊軍とされて瓦解、淀藩・津藩・彦根藩などが新政府軍に寝返ったこともあって旧幕軍の全面的な敗退に終わった。

敗戦を知った慶喜は軍艦で江戸へ脱出。江戸城に入って恭順の姿勢を示し、勝海舟に新政府との交渉を託した。新政府は各地に鎮撫隊を派遣、有栖川宮熾仁（たるひと）親王を東征大総督、西郷隆盛を参謀とした総督府を組織した。

勝と西郷の会談により江戸城攻撃は中止となり、４月１１日、江戸城は無血で新政府に明け渡された。慶喜は水戸に退去し、これによって倒幕は完了したといえるが、会津藩・庄内藩、さらに奥羽越列藩同盟軍や榎本武揚ら旧幕府海軍の抵抗は続き、凄惨な戊辰戦争は明治２年（１８６９）５月まで続いた。

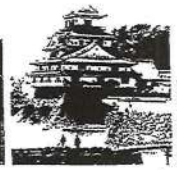
■最後の藩主・元徳と廃藩置県

明治２年１月、敬親は薩摩・土佐・佐賀の藩主と連名で版籍奉還を行った。６月には諸藩主もこれに倣う。多くの藩主はこれを所領安堵の儀式のように受け取ったが、領主を天皇が任命した知藩事にするというものであり、封建制から官僚制への移行を意味していた。

同年１０月には維新の功業が認められ、長州藩に１０万石の賞典禄が下賜されたが、敬親は養嗣子の元徳（もとのり）に家督を譲って隠居した。

最後の藩主（知藩事）となった元徳の治世は廃藩置県までの三年とごく短いが、元徳は敬親の名代としてさまざまな場面で活躍しており、維新の功績の半分は元徳にあるといってもよい。なお、高杉晋作は少年時、元徳の小姓であった。

明治４年７月、新政府は長州・薩摩の主導で廃藩置県を断行した。封建制の完全な終結ではあったが、藩の借金を政府が引き受け、旧藩主は華族として生活を保障されるという条件は、もと藩主たちにとっては決して悪い話ではなかった。



萩城址（左）
現在は指月公園となっている。右は明治７年に解体される前の萩城古写真

高杉晋作

激動の時代を起爆させた、維新回天の革命児

たかすぎしんさく
1839(天保10)～1867(慶応3)
(通) 晋作・東一・和助
(諱) 春風
(字) 暢夫
(号) 東行・西海一狂生・東洋一狂生ほか
(姓) 谷梅之助・谷潜蔵・宍戸刑馬

高杉晋作（右）。「駆けは雷電のごとく、発すれば陰雨のごとし」と称われた型破りな行動力で、晋作は29年を駆け抜けた。

元治元年（一八六四）八月四日、四か国連合艦隊が山口県の長府沖に集結した。

イギリス九隻、オランダ四隻、フランス三隻、アメリカ一隻、合計一七隻の連合軍は大砲一九〇余門、兵員五〇〇〇名あまりの大軍団だ。それに対する馬関（下関）の防備は、砲二二〇門、兵は二〇〇〇ばかり。しかも砲は旧式で射程も短く、機動力も弱い。それでも長州側は敢闘した。だが結果は目に見えている。三日間の戦闘で、長州側は惨敗した。もはや講和しかない。

「講和使節の大役は、あの男しかあるまい」。困惑しきった藩上層部の苦出した評定は、そう結論せざるを得なかった。それにしても「あの男」は、いま牢内の囚人なのだ。

前年の文久三年（一八六三）「八・一八の政変」で京都を追放された長州は沸騰し、激派の連中による一触即発の状態になっていた。これを時期尚早とみていた晋作は、翌年の一月なかば藩主毛利子の命を受けて、東奔西走し、京都の情勢を調べるために潜入する。やがて世子に呼び戻された晋作は、三月末から野山獄に幽閉されているのである。

この間に、六月五日には「池田屋事件」があり、七月十九日ついに長州勢は「禁門の変」を起こして潰滅する。この激動のなかで、吉田稔麿、寺島忠三郎、久坂玄瑞、来島又兵衛、入江九一などなど、有為な同志たちが討ち死にし、桂小五郎も消息不明だ。

　　誓ひしことば　われ忘れめや
　　後れても　君たちに
　　しかし牢内にある晋作は、唇を噛んで耐え、和歌に思いをかく思いを記すのであった。

八月八日、獄内に一発の号砲が響いた。伊藤俊輔（のちの博文）が講和の先触れとして単身で長崎港に乗り込み、連合軍が承知したとの号砲を撃たせたのである。

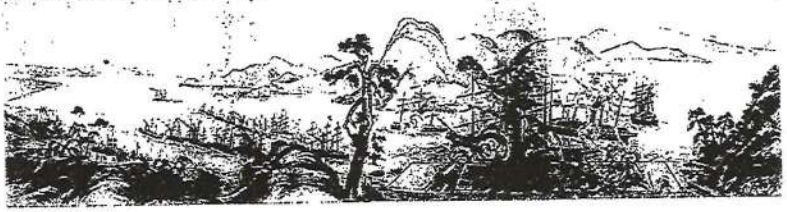
それを合図に、一艘の漁船が、弔砲の煙を残している軍艦を目指して漕ぎだされた。その小舟の中央に、大刀を杖にして、目指す敵艦を睨み据えて立っている晋作は、講和代理の重臣で、講和正使の「宍戸刑馬」とよ高杉晋作だ。その服装たるや、黄色地の麻裃の正装に羽織袴を掛け、頭には烏帽子を載せている。

この大旅装な礼装は、しかし初秋の美しい海峡の風光のなかで、近代を象徴する巨軍艦群を遠景として、中世の源平合戦の錦絵のように映えていた。

　　広い世界に　銃子が無くば
　　やがて世界は　闇となる

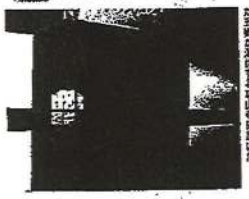
海岸ともにその成りゆきに固唾を呑んで見守り、海峡中が静寂に包まれているなか、低く、静かに、こんな俗曲が海上に流れた。高杉晋作が酒席で戯れに作ったもので、酒器の「銚子」を「長州」に掛けている。しかしこの鶴声を耳にした

幕末の高杉晋作（右端）。御生所勝端の免許を皆伝するなど、剣術の腕も立った。
＊この写真は別人ともいわれている。

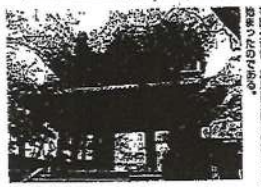


馬関戦争絵図（長府博物館蔵）。外国連合艦隊に大敗を喫した長州藩が、講和全権大使に任命したのは下獄中の高杉晋作であった。

足跡 維新回天の起発地「功山寺」
晋作絶体絶命、捨て身の挙兵!!

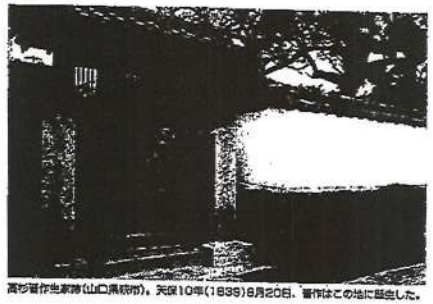


晋作が応援に駆けつけた功山寺門前。第一次長州征伐が、長州藩内の保守派の手で、有利な条件で収束、幕府方の「ことにより長州藩の取り潰しもあり得る」との強硬な姿勢に、晋作は絶体絶命の窮地に立たされた。



そして、絶体絶命のうめき声は出る間もなかった。「ことにより長州藩の取り潰しもあり得る」の強硬な姿勢に、晋作は絶体絶命の窮地に立たされたのである。

金山功山寺
〒752-0979　山口県下関市長府川端1-2-3



高杉晋作出家時（山口県萩市）。天保10年（1839）8月20日、晋作はこの地に誕生した。

関門海峡を見下ろす晋作の銅像（山口県下関市日和山）。西洋っぽい軍服姿の晋作は、いつも引きするような長刺を腰に帯びていたという。

功山寺挙兵で、馬にまたがる晋作の銅像。わずか80名の決起であった。

のは、この小舟に乗っている者だけだ。それもそのはずで、低く唸っているのは正使の宍戸刑馬である。

「こんな真大な使命なのに、まるで海軍にでも出掛けるつもりか」と、副使の高級藩士二名は憤慨し、通訳の井上聞多（のちの馨）はその言動に正気を入っていった。外国との戦いに敗れた講和交渉などという、未だ日本人の経験のない場面に、この三面の青年使節は適する様子がない。「長州の使節は、まるで殿様のように傲然としていた」と、英国側は感嘆をこめて記している。このときの服装といい、態度といい、宍戸使節の計算した効果が発揮されたのだ。そして三回にわたった講和会議で、四か国側は歴史のような使節の態度に頑もしさを抱きはじめ、交渉に安堵感を覚えたのである。

こうして、既に前に関する四項目には宍戸正使と高杉晋作がおのおの承認した。しかし正言目の「長州がはじめに戦争をしかけてきたのだから、損害金を払え」というのに国際した。三〇〇万ドルという途方もない金額だったからだ。それにしても、戦争に対する賠償という欧米の合理的な経済感覚に、高杉は半ば納得し、感心させられた。しかし長州にそんな財源はない。高杉は強引に、講和は幕命によったものだから、賠償金は徳川政府から貰うてくれ、と論じてしまった。

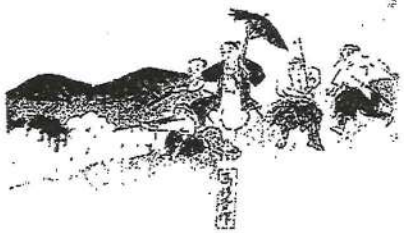
いよいよ講和の調印となったとき、クーパー提督はやり残ないようにと、「彦島」を担保にしたい」と口にした。彦島は下関の沖に浮ぶ小島だ。あんな小島ぐらい貸してやってもいいと、使節団の一行は気軽に考えた。だが高杉晋作だけは、とっさに彦島の話を通想した。英国の狙いは、彦島を基地にし、やがては下関を九龍にする気だ。危うし。

「日本の大名の領地というものは、天朝の土地を借りに預っているもので、一寸たりとも勝手にはならぬ。彦島を担保にするなどとは、とんでもない。しかるに、天朝のものであるかといえば、どこにあらず。そもそも日本の国は、高天ヶ原朝廷の国常立命にはじまり、伊弉諾、伊弉冉命の二柱の神が天沼矛に立たせ給い、天沼矛を以て海を探られ、その矛の先の雫が垂れ落ちて島々が生まれた。最初に生まれたのが淡路の国の淤能碁呂島である。されば二柱の神は、その島に天降りに降りましまして、八尋の御殿を建てさせられ、ご夫婦ともに此の大八洲を産ませ給うた……」

こうして宍戸正使のいう果てるとはない古事記の講釈がはじめられた。

四か国側は呆気にとられていた。会議は判りようもないが、その講釈からただならぬ雰囲気はわかる。さすがの米十通訳官アーネスト・サトウも、無限のない難解な日本語の連続に、もはやどうしてよいのか混乱した。

概観べであったろう。そして後に、クーパー提督側が疲れ果てた。彦島の件はもうどうでもよくなってしまった。高杉晋作の奮闘で、日本は異国の二の轍を踏まずに済んだのである。そして幕末の日本に跳梁していたサトウでさえ、このときの正使が数え二十六歳の高杉晋作その人であったとは後に気付かなかった。



奇兵隊を指揮する晋作（山口県立山口博物館蔵）。苦下状に登流し佐という具合。

功山寺門前で三条実美以下の五卿に決起の告を伝える晋作（金山博物館蔵）。

晋作の拳銃（金山歴史民俗館）。晋作はもう一丁を坂本龍馬に譲った。

高杉晋作略年表

西暦	事項
1839	萩藩士高杉小忠太の長男として生まれる。
1857	藩校明倫館の入舎生に進級する（父に従って吉田松陰の松下村塾に通う）。
1857	文学修行のため、江戸に出立。
1859	藩命により、帰藩。久坂玄瑞らと吉田松陰の墓を弔う。
1860	山口修行、井上平右衛門次女まさと結婚する。 明倫館舎長となる。 海軍蒸気科修行のため、江戸へ再遊航海する。 東北を遊歴し、剣術修行をしたり佐久間象山、横井小楠らを訪ねる。 柳生新陰流の免許皆伝を受ける。
1861	藩世子定広の小姓役となる。
1862	幕府使節随行員（長州藩代表）として上海へ。 帰国後、久坂、井上聞多らと品川の英国大使館を焼打ちする。
1863	松陰の遺骸を小塚原から世田谷に改葬する。 3月・孝明天皇に供奉する将軍家茂に「よっ！征夷大将軍！」と野次を飛ばす。 髪を落とし、10年間の暇を乞い許される。 6月・白石正一郎邸にて奇兵隊を結成する。 9月・奇兵隊総督を罷免される。
1864	京都進発論者・来島又兵衛の説得に失敗し、脱藩し、そのまま上洛する。 3月・脱藩の罪で、野山獄に投ぜられる。 7月・禁門の変勃発。来島戦死、久坂自害。 8月・英仏米蘭の四カ国連合艦隊が下関を砲撃開始し、長州藩大敗する。 四カ国連合艦隊との和睦交渉全権大使に任命され、出獄する。 10月・藩内に佐幕派が台頭したため、九州への亡命を余儀なくされる。 12月・遊撃隊・力士隊約80名を率いて、功山寺で決起。藩の会所を奪う。
1865	1月・内戦に勝利し、藩論を統一する。 保守派に狙われたため、美祢おうのを連れて四国へ亡命する。
1866	薩賄で、軍艦丙寅丸を購入する。 海軍総督となる。 6月・対幕府戦争（四境戦争）が始まる。 7月・体調の不快を訴える。 海陸軍参謀となる。 8月・小倉城を落城させる。 10月・病状進み、療養に入る。
1867	4月14日・林算九郎邸で病死する。

多くの逸材を育成した行動する思想家

吉田松陰

よしだしょういん
1830（天保元）～1859（安政6）
（通）虎之助→大次郎→松次郎→寅次郎
（諱）矩方
（字）義卿・子義
（変）松野他三郎
瓜中万二
（神）吉田貫次郎・藤原矩方命

吉田松陰像（京都大学附属図書館蔵）。獄死の直前来遊やる中国取計画など、松陰の行動は激越だった。だがそれは、松陰の透徹した思想がなせるものであり、その芽えは多くの門下に受け継がれ、やがて維新の原動力となっていった。

生家を訪ねた吉田松陰と金子重之助の墓（山口県萩市）。

下田港での松陰、このあと伊豆に護送された。

長期連載 第30回

松陰は六歳で山鹿流兵学師範の吉田家を継ぎ、父杉百合之助、叔父玉木文之進から過酷なまでに厳しい教育を受け、十一歳のときには藩主毛利敬親に「武教全書」を講義するまでに成長した。その後、家学の後見人であった山田亦介右衛門、山田亦助によって世界へ目を向ける機会を得た松陰は、嘉永二年（一八四九）に大津・豊浦・萩間関の海岸線を踏査によって視察し、海岸防備のお粗末な実情を知り、危機感を募らせた。

松陰は旅の人でもあった。その行程は北海道を除きほとんど全国に及んでいる。その間、佐久間象山の感銘的影響を強く受けた松陰は、嘉永六年ペリーの来航に際し密航を企てる。が、果たせず、ロシア軍艦が長崎に来航すると聞くや長崎まで出向いたが、これも果たせなかった。

翌安政元年（一八五四）三月二十七日夜、和親条約の締結のために再度来航し下田沖に停泊していたアメリカ軍艦に、金子重之助とともに身を投じて密航を依頼したが、容れられなかった。

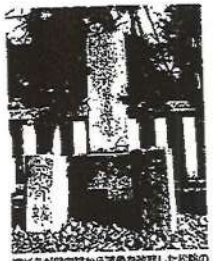
松陰と重之助の二人は自首し、獄舎の人となる。その後、幽閉の処分を受け、萩へ護送されたが、萩藩の処分は幽閉より重い野山獄への入獄であった。この野山獄生活はおよそ一年に及ぶ。松陰は読書や思索、同囚との句会や吉田の講義などで日を費やし、同囚等の獄放運動までしている。安政二年十二月、ようやく実家の杉家に預けられて幽囚生活が始まる

吉田松陰像（京都大学附属図書館蔵）。日本から出ようとは思わず、松陰の意志、行動は国の数人が認れる全国を通じ過激なものだった。

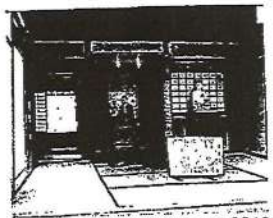
吉田松陰略年表

西暦	事項
1830	8月4日・杉家に生まれる。
1834	山鹿流兵学師範吉田家の養子となる。
1835	吉田家を継ぎ、叔父玉木文之進から教えを受ける。
1849	自藩の海岸線を視察し、海防論を募らせる。
1851	藩主に従い江戸へ。佐久間象山らの知遇を得る。 12月・宮部鼎蔵に誘われ、東北遊歴。脱藩の罪を問って士分を剥奪される。
1853	6月・ペリー来航。黒船への密航を企てるが未遂。
1853	長崎に来航するロシア軍艦に投じようとして失敗。
1854	1月・ペリー再来航。金子重之助とともに米艦に乗り移せ、密航を請うが聞いてもらえず、自首する。下田獄から江戸、さらに萩へ護送され、野山獄入獄。
1855	実家の杉家お預かりとなり、松下村塾を主宰する。
1858	幕府専断の条約調印に怒り、老中間部詮勝暗殺、大原重徳西下などを企てるが、成就せず。
1859	10月27日・安政の大獄で斬首される。

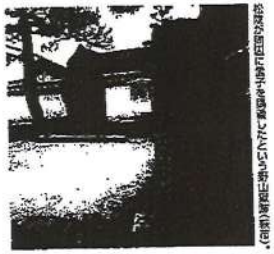
吉田の松陰（萩市）。数くの逸材はここから育まれた。



高杉らが脱藩から逃亡を決行した松陰の墓（東京都世田谷区松陰神社内）。



松下村塾内部（山口県萩市松陰神社内）。ここから多くの有為の人材が巣出された。



松陰が幽囚生活を過ごしたという野山獄（萩市）。

が、この幽囚生活が松陰の最も充実し、落ち着いた日々であった。松下村塾で塾生を教えていた時期である。

松下村塾は玉木文之進、久保五郎左衛門に委嘱されてきたものだが、やがて松陰が主宰者となり、高杉晋作・久坂玄瑞・前原一誠・山田顕義・伊藤博文・山縣有朋・吉田稔麿・野村靖など約八〇人の人材を育成した。松陰は「飛耳長目帳」に有為の人物を記録した。

「留魂録」（萩市松陰神社蔵）。「舟はたとひ敵国の海辺に行かんとも　留置まし大和魂」と書き遺し、松陰は逝った。

という独特の情報収集系で国内の情報を収集し、特に幕府による過酷な条約の無断調印を厳しく批判し、老中間部詮勝の暗殺、公家大原重徳の西下などを計画し、幕府に必要な大砲などの武器を藩政府に要求している。藩政府はこの過激な言動を恐れ、松陰を再び野山獄に収容した。

安政六年五月、幕府は松陰を江戸へ護送することを命じた。幕府の意図は、萩へ送して松陰と会った梅田雲浜との関係をただすものであったが、松陰は老中暗殺計画、大原重徳西下、策謀などを白状した。これは松陰の「国禁を犯すものあれば、他人を感化できる」という信念によってなされたものである。

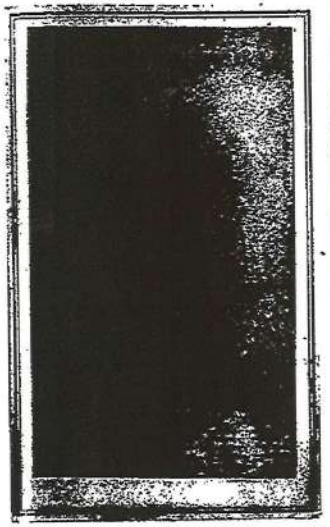
しかし、幕府の裁定は死罪であった。同年十月二十七日、松陰は斬首された。「草莽崛起」、すなわち在野の民間人こそが変革をなしうるという信念に達した松陰の思想は、その門下に受け継がれた。

松陰誕生地（萩市）。生家、松陰神社のすぐそばにある。

尊攘過激派とは一線を画す冷静な革命家

木戸孝允

きどたかよし
1833（天保4）～1877（明治10）
(通) 桂小五郎→木戸貫治→桂一郎
(諱) 孝允
(号) 松菊・木圭・広寒・猫堂・老梅樹屋・竿鈴
(変) 広江孝助



[右上]洋装の木戸孝允像（山口県萩市・京都市美術館）。制作年不明。[右下]木戸孝允像（部）。[上]下駄を履いて写る木戸孝允像（部）。維新前の雰囲気を伝えている。[下]京都ホテル前（元・長州藩邸）に建つ木戸孝允肖像（京都市）。維新後、遊説を続ける木戸の貫禄ぶりは、ちょはや名人芸ともいえるものだった。

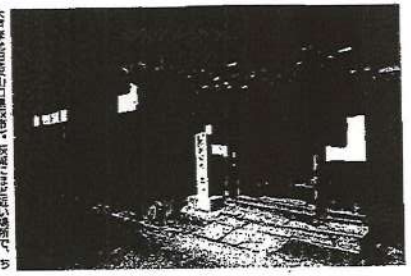
西郷隆盛・大久保利通とともに維新前は桂小五郎）が、歴史の表舞台に登場するのは、江戸の剣聖斎藤弥九郎の道場に入門し、塾頭になったときである。

木戸は剣術だけでなく遊船術、蘭学も学び、万延元年（一八六〇）八月には、江戸湾に停泊中の長州藩の軍艦丙辰丸の船上で、水戸藩の西丸帯刀などと丙辰丸盟約を結んだ。これは桂田門事変以後の政局をめぐる水戸藩を中心とした運動に、木戸も海防問題を通じて参画し、初めて政治運動に入ったことを示すものである。

文久元年（一八六一）、長州藩の獄吏は長井雅楽の提唱した「航海遠略策」に基づく公武合体策に決定し、朝廷と幕府の間で周旋が始まる。木戸は久坂玄瑞・高杉晋作などがかつての吉田松陰門下と結んで反対運動を展開した。だが、久坂などの尊攘過激派とは全面的に同調しないところもあった木戸は、同二年五月、京都で公家や他藩との折衝にあたるなどした。

翌三年の八月十八日の政変で長州藩は京都を追われたが、木戸はしばらく京に潜伏し、雌伏に努めた。後年、木戸夫人となった芸者幾松は、木戸に献身的に尽くし、新選組の追捕からたびたびその危急を救ったことはよく知られている。

元治元年（一八六四）四月、木戸は京都留守居役となる。国元の来島又兵衛ら尊攘過激派が八・一八クーデターの巻き返しを図って京都進出を企てるのを水戸



木戸孝允旧宅（山口県萩市）。故郷にはさぞ居心地のよい場所だ、ちょっと昼寝をかんと思わせる雰囲気が漂っている。

[日本橋の記憶 第六回 芸者幾松（後の木戸孝允夫人）と妾宅（現在の料亭・酒一）]（明治初期）。京都祇園の芸者幾松（後の木戸孝允夫人）と妾宅（現在の料亭・酒一）。

木戸孝允像（55歳）。維新後の木戸は、まるで政治に情熱を失ったかのようで、目立った動きが少ない。征韓・在台論にはいずれも反対し、往年の冷静さを遺憾見せた。明治10年（1877）5月、西南戦争の進捗に心を痛めながら病死した。

長州志士の銅像が勢揃い

松陰記念館

萩の駅・反射炉公園行、上宮田徒歩15分。吉田松陰・高杉晋作・木戸孝允ほか幕末の銅像・資料館・記念館・吉田松陰の墓・実家・旧宅などがある。

所在地：〒758-0061 山口県萩市椿東ヶ城1258
電話：0838-22-9889

木戸孝允略年表

西暦	事項
1833	6月26日・萩呉服町江戸至横町で生まれる。
1849	吉田松陰の門下となる。
1852	斎藤弥九郎の練兵館（神道無念流）に入る。同じ頃、蘭学・遊船術も学ぶ。
1860	8月・水戸藩士西丸帯刀らと丙辰丸盟約を結ぶ。
1864	6月・池田屋事変。木戸は会合にいかずに助かる。
	8月・蛤御門の変後、但馬方面に潜伏する。
1865	4月・帰藩。木戸貫治と改名。
1866	1月21日・京都で薩長秘密同盟を締結。
	9月27日・木戸準一郎と改名。
1868	1月・太政官出仕。五箇条の御誓文の草案を作成。
1870	6月・参議となる。
1871	7月・西郷とともに廃藩置県を成し遂げる。
1871	岩倉使節団の副使として渡欧する。
1876	3月・参議免官。内閣顧問ののち宮内省に出仕する。
1877	5月26日・京都で病没。

は抑えようとするが、七月十九日、蛤御門の変を起こし、長州藩は中央政界から大きく後退、木戸は桂小五郎と変名して幕府の探索を避け、但馬出石に潜んだ。

慶応元年（一八六五）四月二十六日、木戸は高杉晋作・伊藤博文などの勧めで帰藩し、対幕戦に備えて藩政の改革を実行するなど、藩政の中枢に位置した。九月二十九日には藩命によって、名を桂小五郎から木戸貫治と改めた（翌二年九月二十七日にさらに準一郎と改名）。

慶応二年正月二十一日、土佐浪人の坂本龍馬の周旋により、木戸は京都の薩摩藩邸で小松帯刀・西郷隆盛らと薩長同盟を秘かに締結した。長州藩では「藩論統一夜の如き」状況で、待敵準備が完了した。同年六月七日、幕府軍艦と松山藩兵が大島郡を攻撃したことに端を発する四境戦争が始まったが、長州藩は芸州口・石州口・小倉口のいずれにおいても勝利を収めた。幕府はこの敗戦で著しく権威を失墜した。以後、長藩は討幕出兵の協力策を話し合い、幕府討伐戦を遂行していく。

幕府が倒れると、木戸は新政府の参与となり、長州藩を代表する実力者として五箇条の御誓文作成に深く関与した。また、版籍奉還の実現に中心的役割を果たし、岩倉使節団の副使として欧米を視察するなど、新政府の安定に貢献した。しかし、長州閥の総帥としては政治的指導力を漸次失っていき、明治十年（一八七七）五月二十六日、京都で病死した。

伊藤博文

抜群の政治感覚で軽輩から初代首相へ

伊藤博文像(石原)。伊藤は抜群の政治的センスで、維新前は高杉晋作・木戸孝允に従い、維新後は大久保に接近、いつしか明治政府の中心的人物となっていった。

倒幕時代の伊藤(右)。政治時の裏内では、井上馨(クーリー)扱いされ、苦労をなめた。

伊藤博文公園(後藤田倉庫内)。伊藤は「初代総理の家」を建て、初代総理の家を建てた。

いとうひろふみ
1841(天保12)～1909(明治42)
(通)利助・利介・利輔
一舜輔・俊輔・
春輔・俊介
(諱)利済一利廻
(号)春畝・滄浪閣主人
(変)越智斧太郎
花山春輔・デポナー*
花山春太郎
吉村荘蔵・林宇一

初代首相 享年69

記念館 初代首相を知る洒落な資料館

幕末から明治、初代の総理大臣を生んだ伊藤博文の生涯を多種資料と映像で紹介する。伊藤公記念公園内にあり、散歩も楽しい。

伊藤公資料館
所在地：〒743-0105山口県光市大和町束荷2250-1
電話：0820-48-1623
URL：http://www.joho-yamaguchi.or.jp/yama-sho/siryou.html

萩家らしい、質素な造りの伊藤博文旧宅(山口県萩市)。

伊藤は周防国熊毛郡束荷村の農民に生まれた。その変転は相州浦賀警衛所に来原良蔵に出会い、その紹介で松下村塾に学ぶことに始まる。吉田松陰は伊藤を「技倆（技術）は将来高議家（政治家）になるだろう」と、その才能を見抜いている。

その後、伊藤は木戸孝允に従って尊攘運動に挺身し、文久二年（一八六二）には、高杉・久坂・井上馨らと品川の英国公使館焼き討ちに参加した。翌三年には「終身十死一班之人」として十分待遇となる。同年五月、井上馨・井上勝・山尾庸三・遠藤謹助らと英国へ留学。だが翌元治元年（一八六四）の四か国連合艦隊による下関攻撃を知るや井上馨と急ぎ帰国、怪しげな英語で列国との講和にあたった。同年暮れから慶応元年（一八六五）正月には、高杉晋作の挙兵を助けて参戦した。

明治以後は兵庫県知事、工部大輔などを歴任、岩倉使節団の副使として欧米を視察し、帰朝後は参議兼工部卿となり、大久保利通を中心とする近代化政策を推進していった。大久保・西郷・木戸などの維新の元勲がいなくなった頃、伊藤は明治政府の中心的人物となっていた。

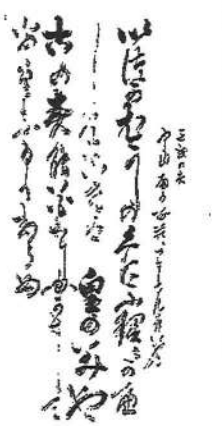
明治十八年（一八八五）十二月、伊藤は内閣制度を導入し、初代総理大臣に就任、第四次内閣まで組織し、明治憲法制定にも尽力した。同三十八年十二月、初代韓国統監として赴任、韓国併合を図る安重根にハルビン駅頭で暗殺された。

*元治元年(1864)、渡欧した伊藤が顔変を防くため「日本人によく似たポルトガル人」として使った変名。井上馨は変名を忘れてしまったらしく、使わっていない。

山縣有朋

軍人から政治家へ転身した明治日本の重鎮

山縣有朋像(石原)。久坂玄瑞の紹介で松門となったことは、山縣の人生にとって、最大の転機であったろう。門下の高杉晋作が奇兵隊を結成すると軍監としてはを守備、以後、維新の激動期を奇兵隊とともに生きた。和歌に造詣が深く、雅号も多い。現在は結婚式場として知られる東京都文京区の椿山荘は、かつて山縣の別邸があった場所である。



「山縣有朋 今様歌」(京都大学附属図書館蔵)。この歌は慶応3年(1867)、京都二本松の薩摩屋敷に滞在中、旧作を即興したものという。「壬戌の春中山殿の別宅にめされけるとき　いつかりかしのくにかりニ、かへしてこそは　桑の、みやこの春の花をしも、かさしてあそみ日もゝるゝ」。歌にある中山殿は忠能(ただやす)のことで、王政復古の中心的人物、のちの明治天皇外祖父でもある。

やまがたありとも
1838(天保9)～1922(大正11)
(通)辰之助一小助・小輔
一狂介
(号)狂介・含笑
茅城山人
倚山荘主
無隣庵主
小陶庵主
古稀庵主

奇兵隊軍監 第3代首相 享年85

記念館 元老山縣有朋の数寄を見る

関東大震災の教訓から造った住宅の一つだ。部の建築を参考、公開している。数寄屋建築の傑作。

山縣有朋記念館
所在地：〒329-2501栃木県矢板市上伊佐野1022
電話：0287-44-2320

山縣有朋略年表

西暦	事項
1838	閏4月22日・中間の家に生まれる。
1863	12月・奇兵隊に加わり、軍監就任。
1864	4か国連合艦隊との戦闘で負傷。
1865	1月・藩内戦に参戦、勝利する。
1866	8月・四境戦争では小倉口で戦う。
1868	北陸道鎮撫総督府参謀会津征討総督参謀として、戊辰戦争を転戦する。
1869	ヨーロッパを視察。
1871	兵部大輔（のちの陸軍大輔）就任。
1873	初代陸軍卿に就任する。
1874	8月・参議就任。以後、閣僚を歴任。
1889	首相就任(1898年に第二次内閣)。
1922	死去。

萩藩の中間の家に生まれ、少年期から槍術に励み、倦の小助とも呼ばれた。松下村塾に学び、松陰の「飛耳長目説」で京都情勢を視察し、尊攘派の人と交わった。文久三年（一八六三）には高杉晋作の奇兵隊に入隊、山縣は奇兵隊軍監として、元治元年（一八六四）八月の対四か国連合艦隊との戦闘、慶応元年（一八六五）正月の内戦、同二年の四境戦争では小倉口、戊辰戦争では北越方面で戦った。

明治二年（一八六九）には欧州を視察し、帰朝後は兵部大輔となり徴兵制改革に奮闘した。同六年には初代陸軍卿に就任、徴兵令を実施した。佐賀の乱、萩の乱、西南戦争において、この徴兵令で召集した軍隊が士族を破り、勝利を収めることとなる。山縣の脳裏には、幾らく奇兵隊のイメージがあったのであろう。

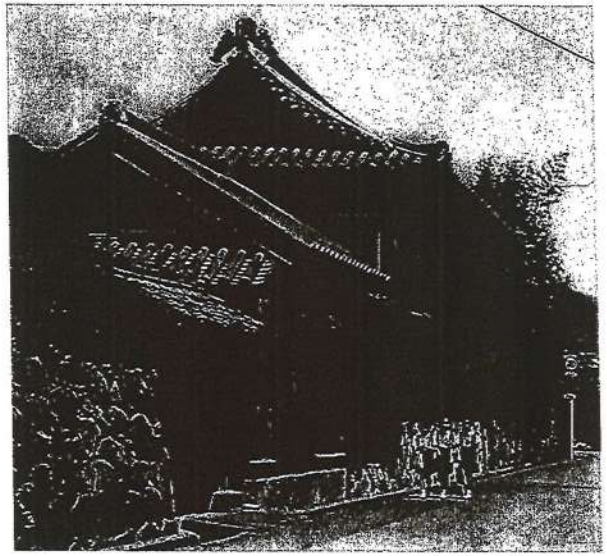
明治十八年、内閣制度の下では内務大臣を務め、政治家としても地方制度制定に強い意欲を示し、同二十二年十二月には総理大臣となり、第一次内閣を組織した。日清、日露の両役には軍の上層部として参画、その後、第二次内閣を組閣するが、これを最後に政治の表舞台からは身を引いた。しかし、山縣直系の桂太郎、寺内正毅が組閣するなどして、政界、軍に絶対的な影響力を行使し続けた。特に伊藤博文がハルビン駅頭で暗殺されてからは、長州系最大の元老として、政界の中枢に位置した。

●国選定重要伝統的建造物群保存地区

はぎし ほりうち でんけんちく

萩市堀内伝建地区

選定年月日 ： 昭和51年9月4日
所在地 ： 萩市大字堀内
指定面積 ： 77.4ha



▲永代家老 益田家物見矢倉

選定地区は旧萩城三の丸地域で、堀内といわれる広さ東西9丁余(約990m)、南北6丁余(約660m) の約77.4haである。藩政時代、藩の諸役所（御蔵元・御木屋・諸郡御用屋敷・御舳夫所・御徒士所）や毛利一門、永代家老、寄組といった重臣たちの邸宅が建ち並んでいた。

現存の建物としては、永代家老益田家（12,000石）の物見矢倉、旧周布家（1,530石）の長屋門、繁沢家（1,094石）の長屋門、永代家老福原家（11,300石余）の長屋門、口羽家（1,018石）表門と主屋等がよく旧態をとどめている。明治以後、士族救済のために広大な屋敷跡に植栽された夏みかんが、これら長屋門や土塀などと一体をなし、歴史的風致を残している。

●国指定重要文化財：建造物

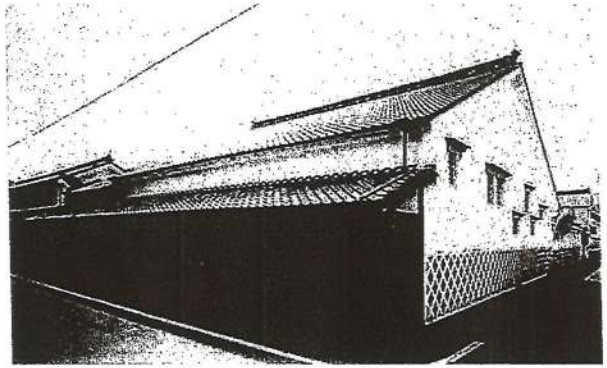
きくやけじゅうたく

菊屋家住宅

指定年月日 ： 昭和49年5月21日
所有者 ： 財団法人 菊屋家住宅保存会
所在地 ： 萩市大字呉服町一丁目
員数 ： 5棟

菊屋家の先祖は、毛利氏に従い広島から山口に移って町人となり、さらに萩城の築かれた慶長年間に萩に移ったといわれ、後には藩の御用達を勤めるほか、その屋敷は幕府巡見使の宿として本陣にあてられてきた豪商であった。

【主屋】
主屋の建築年代は明らかではないが、家に伝わる勧功書や建築手法からみて承応元年(1652)から明暦3年(1657)までの間に建てられたものと考えられる。
桁行 13.0m、梁間 14.9m、切妻造り桟瓦葺きで居室部は前寄り一間半を「みせ」とし、その奥は土間寄りに役向きの部屋が3部屋設けられている。その上手は東に面して座敷2部屋があり、南寄りに家族の生活の場が間取りされている。
全国的にみても現存する大型の町屋としてその価値は極めて高い。



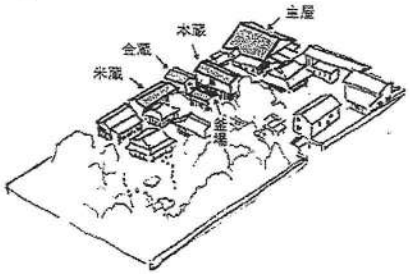
【本蔵】
本蔵は主屋の後方にあり、土蔵づくり桁行 11.7m、梁間 4.8m、2階建て、切妻造り桟瓦葺き土蔵で、建築年代は明治ごろと思われる。

【金蔵】
金蔵は本蔵の後方で、屋敷西側の道路に側面して建っている。桁行 6.1m、梁間 4.2m、2階建、切妻造り桟瓦葺き土蔵で、建築年代は江戸中期から後期のものと思われる。内部には板石囲いの地下室が設けられている。

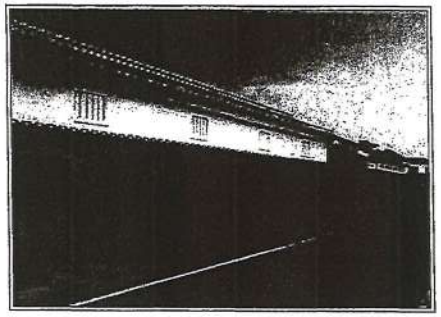
【米蔵】
米蔵はさらに後方の道路に沿って建っている。桁行 11.8m、梁間 4.0m、切妻造り桟瓦葺き土蔵で、内部は石敷きの床であるが、以前は床板の建物であった。建築年代は19世紀ごろと思われる。

【釜場】
釜場は金蔵の東側にある桁行 6.0m、梁間 4.0m、切妻造り桟瓦葺きの小規模な建物で、北面は吹き放し、ほか三方は土大壁である。19世紀初めごろの建築と思われる。

これらの屋敷は、主屋が極めて古く、蔵その他の付属屋も屋敷構えの一環として貴重であり、主屋と数棟の蔵が建ち並ぶ西側の景観は「国指定史跡萩城城下町」の地域内にあって重要な構成要素の一つをなしている。



菊屋家の沿革



菊屋家は摂津の国(大阪)住吉大社の、津守摂津守国量朝臣を祖とし、中世期大内氏に随身して山口に住み、同氏滅亡後は武士を捨てて町人となった。その頃、山口四十八町の惣町支配を勤め、永禄十二年(1569年)大友宗麟の後押しで大内輝弘が山口に乱入した時は四十八町の人を連れ、高嶺城にたてこもって防戦に功があり、毛利元就から感状をうけた。また毛利輝元が関ヶ原の戦いの直後、京都伏見から広島へ帰る路銀が不足していることを聞いて急場の難を救ったこともある。このころまでは津守姓であったが、のちに石川姓・菊屋姓に改めた。

慶長九年(1604年)輝元の萩入国に従い、現在地に屋敷地を拝領して家を建てた。また城下の町割りに尽力し、阿古ヶ浜には藩士や足軽衆のための家を建てて住まわせたので、それより世上阿古ヶ浜を菊ヶ浜と称するようになった。その後、菊屋家は代々大年寄格に任命され藩の御用達を勤めた。

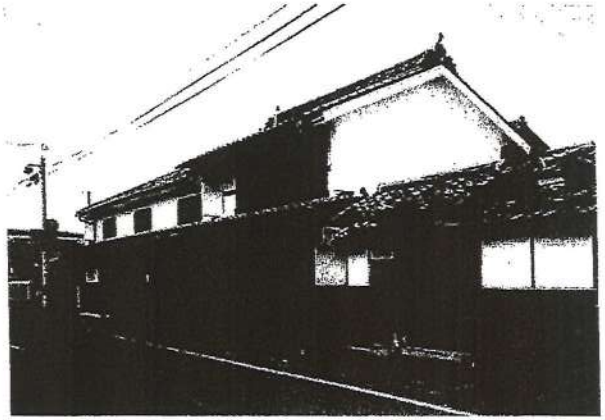
また度々、御上使の本陣を命ぜられ、その他御究場所・恵民録役所等しばしば藩の御用宅に借り上げられていた。

●市指定有形文化財:建造物

きゅう くぼたけじゅううたく

旧久保田家住宅

選定年月日 : 平成15年6月27日
所有者 : 萩市
所在地 : 萩市大字呉服町一丁目
員数 : 4棟



久保田家は初代庄七が藩政時代後期に近江の国(滋賀県)から萩に入り、熊谷町の久保田家の分家となり、菊屋家の向かいで呉服商を営業していたと伝えられている。二代庄二郎の時酒造業に転じ、造り酒屋の「あらたま酒店」を営業していた。また明治時代、しばしば名士の宿舎としても利用された。

【主屋】
主屋の建造年代は明確ではないが、主体部の構造手法からみて幕末頃に建てられたと思われる。大黒柱を中心に、太い差鴨居を縦横に組んで軸部を固めた堅固な造りとなっており、桁行十一間半、梁間十一間切妻作り、桟瓦葺き、平入り一部2階で町屋であるが通り庭はない。庭に向いた縁側の手すりなど、それぞれ意匠を凝らしており、近代和風建築の特色が良く表されている。

【離れ】
離れは造作の質が高く良材を用いて丁寧に建てられている。桁行四間半、梁間三間半、入母屋造、桟瓦葺、平屋建てで、南面、北面に半間の庇を付け、平面は田の字型になり、東北隅の縁側から渡廊下で便所棟が北側に繋がっている。建築年は明治16年頃と思われる。

【土蔵】
土蔵造り桁行四間半、梁間二間半、2階建切り妻造、桟瓦葺で西側に入り口を設け、床は1・2階とも板張りとし、床下に石造の物入れが造られ、算盤を敷いて石造りの釜を滑らす納まり工夫が施されている。建築年代は明治16年頃と思われる。

【表門】
門は脇木門切妻造桟瓦葺、桟唐戸を吊り込み、西側に潜戸を設けている。柱は上下に縮が付き足元に練型付きの礎盤を敷き、斗、実肘木など全体に装飾を取り入れた意匠でまとめている。

旧久保田家住宅は、幕末から明治前期にかけての建物として、意匠、構造、技術に優れ、酒造業で繁栄した往時の状況をよく伝えており、史都萩城城下町を形成する建物として極めて重要である。

★常栄寺（じょうえいじ）

常栄寺雪舟庭園

山口市宮野下にある臨済（りんざい）宗東福寺派の寺。香山（ｺｳｻﾞﾝ）と号する。常栄廣利禅寺ともいい、俗に「雪舟寺（せっしゅうじ）」といわれる。本尊は千手観音菩薩（せんじゅかんのんぼさつ）。1563年（永禄6）に没した毛利隆元（たかもと）の菩提（ぼだい）を弔うため、安芸国（あきのくに）吉田（広島県安芸高田（たかた）市吉田町）に竺雲恵心（じくうんえしん）を開山として建立したのに始まる。現在地にはもと大内政弘（まさひろ）が母の菩提を弔うため建立した妙喜寺（のち妙寿寺、興国寺と改名）があった。安芸の常栄寺は正親町（おおぎまち）天皇の勅願寺となっていたが、毛利氏が防長2州に移封となるとともに、当寺も山口に移転、上宇野令（かみうのりょう）（山口市）にあった香山国清寺とあわせ、香山常栄寺と号した。1863年（文久3）寺号を潮音寺（ちょうおんじ）とし、寺地を上宇野令から現在地（興国寺内）に移転。1888年（明治21）に常栄寺の寺号に復した。本堂の北にある庭園は、大内氏29代政弘が室町時代中頃に画聖雪舟に命じて築庭したものと伝えられ、一般に雪舟庭（せっしゅうてい）といわれるが、文献などに雪舟の築造を確かめるものはなく、あくまでも伝説。三方を丘に囲まれた回遊式の林泉が広がっており、心字池や仮山など、室町時代の代表的な禅宗流庭園様式として知られ、枯山水石庭の典型的なもの。庭の東北側の隅に滝を設け、その前に広い池、周囲に仮山を築き庭石を配置している。内庭には樹木を植えず、その配石や立石の手法は独特である。

★山口市菜香亭（やまぐちしさいこうてい）

明治10年頃、上竪小路に料亭として創業し、名付け親である井上馨など、山口県出身の政治家や文人らに親しまれた「菜香亭」。山口市天花の地に移築され、平成16年10月2日にオープン。

移築前の木材などをできるかぎり使用した建物の中には、伊藤博文や佐藤栄作らの書も飾られており、当時の面影を今に伝えている。

山口市菜香亭は、大内氏の時代から現代に続く山口市の歴史において、近代山口を知る貴重な建物であり、その歴史を次代に継承していく場として、また大内氏の歴史が薫る大殿地区における大内文化まちづくりの拠点施設として、菜香亭ゆかりの所蔵品等の展示、歴史や文化をいかした事業の実施、市民の文化活動やまちづくり活動の場の提供を行っている。

★八坂神社

拝殿

本殿
（国重要文化財）
永正年間（室町時代）
の建立

京に憧れた24代大内弘世が、京の八坂神社から神霊を勧請したもので、京都と同じく祇園社と呼ばれている。約500年前の室町様式建築の本殿は重要文化財に指定されている。

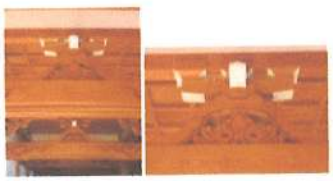
八坂神社(やさかじんじゃ)は、素戔嗚尊(すさのうのみこと)、櫛稲田姫命(くしなだひめ)、蛇毒気神(だどくけのかみ)、八柱御子神（やはしらのみこがみ）を御祭神としている。

永正16年に建立されたままのもので重要文化財に指定されている。三間社流造りで、桁行4.67m、梁間4.69m、屋根は桧皮（ひわだ）葺、本殿の四囲および向拝の13箇の変化に富んだ蛙股が特徴的である。蛙股は束の一種であるが、実際には束としての役目よりは、装飾として考えられているという状況である。この八坂神社の蛙股は形が優美であることや、他に類例の少ない珍しい図柄、花や果物、雲などが彫刻されているということで注目されている。 祇園さんの愛称で呼ばれ、縁結び、厄除け、商売繁盛などのご利益があるとされている。

＜蛙股＞

蛙股（かえるまた）とは輪郭が山形をした部材で、構造上に必要な支柱でしたが、後に装飾化されました。見た目が「蛙が股を広げたような形」になりますので蛙股と呼ばれています。通常、梁（はり）や桁の上にあります

厚い板状のままの板蛙股と、内部をくりぬいて透かせた本蛙股とがあります。



★龍福寺

龍福寺は、始め白石の地にあり、18代大内満盛が創建した臨済宗の古刹で、宝珠山瑞雲寺と称した。28代大内教弘の時代に、臨済宗を曹洞宗に改めたとき、瑞雲山龍福寺と改称した。

天文20年（1551）天文の乱（陶晴賢が主君・大内義隆に対して起こした謀反。31代大内義隆が、長門国深川大寧寺で自刃）において、兵火にかかり焼失したが、弘治３年（1557）義隆の七回忌に際し、毛利隆元が、同じ天文の乱で焼失した大内氏代々の居館大殿屋形跡であった現在地（大内氏館跡・国指定史跡）に堂宇を建立し、義隆の菩提寺とした。

しかし、その建物も明治14年（1881）、禅堂と山門を残して全焼したことから、明治16年（1883）、大内氏の氏寺である吉敷郡大内村の氷上山興隆寺※にあった釈迦堂を移建したのが現在の本堂である。

本堂は、方五間、出組組物、二軒繁垂木の堂々たる姿を備え、和様にわずかに唐様を取り入れた様式からなる。内部の大虹梁、板蟇股、組物等の構造手法においても見るべきものがある。

この堂の建立年代を知る資料を欠くが、形式手法から見て室町時代に属するもののようである。唐様の国宝功山寺仏殿に対し、和様を主とした形式の仏堂として重視すべきである。

※興隆寺は天台宗で、大内氏の氏寺として大いに栄えた。寺伝では、推古天皇のとき聊聖太子の創建と伝える。暦応４年（1341）焼失したが、貞和５年（1349）23代大内弘幸が再建した。以降、江戸時代にも寺領はかなりあり、古法を守っていたが、明治維新後寺領を失い敗頽し、本堂（釈迦堂）も明治15年龍福寺に売却され、その他の諸堂宇もことごとく取り払われ、国指定工芸品（重要文化財）の梵鐘の他は、大内氏時代の建物は姿をとどめていない。

重要文化財

釈迦堂（本堂）－入母屋造、檜皮葺き。室町時代の建立。かつては大永元年（1521年）の建立とされていたが、解体修理時に発見された部材墨書や古文書の精査により、文明11年（1479年）の建立とされている。2006年2月から復元解体修理工事が実施され、2012年4月に竣工した。この復元修理では、明治の移築時に瓦葺きに改められていた屋根を、檜皮葺きに復旧したほか、改造されていた間仕切り、須弥壇、建具などが復旧された。

★瑠璃光寺五重塔＜国宝＞（るりこうじごじゅうのとう）

国宝。大内文化の最高傑作といわれる。大内氏前期全盛の頃、25代大内義弘は現在の香山公園に、石屏子介禅師を迎え、香積寺を建立。義弘は応永6年（1399年）足利義満と泉州で戦い戦死（応永の乱）。26代弟・盛見は兄の菩提を弔うため、香積寺に五重塔を造営中、九州の少弐氏・大友氏と戦って戦死。五重塔はその後、嘉吉2年（1442年）頃落慶。

それからしばらくの時を経た関ヶ原の合戦の後、毛利輝元が萩入りし、香積寺を萩に引寺。跡地に仁保から瑠璃光寺を移築し、これが今日の姿。

全国に現存する五重塔のうちで10番目に古く、美しさは日本三名塔の一つに数えられ、室町中期における最も秀でた建造物と評されている。ちなみに、日本三名塔の他２基は、奈良県の法隆寺と京都府の醍醐寺にある五重塔。また、檜皮葺屋根造りのものは瑠璃光寺の他に、奈良県の室生寺と長谷寺、そして広島県の厳島神社にもある。

この国宝、五重塔は観光山口のシンボルとして桜や楓の裏山を背に、大内文化を優雅に伝えており、日没ごろから数時間ライトアップされ、夜も見どころの一つ。

■五重塔の構造

五重塔は相輪の尖端まで31.2メートル、各層軒が広く張出し、檜皮葺の屋根の勾配は緩くなっている。塔身は上層ほど間を縮め、塔の胴を細く見せ、すっきりした感じがする。これに対して初重の丈が高く、柱が太く二重目には廻縁・高欄があるので安定感が強く感じられる。鎌倉時代から、建築様式に、和様・唐様（禅宗様）・天竺様（大仏様）の３つがあらわれるが、和様を主体に、一部を禅様に、室町建築としては装飾が少ない造りとなっている。

■その他

瑠璃光寺資料館 － 五重塔の模型や資料を展示している。また日本にある主要な五重塔55基を100分の1の模型とパネルで紹介しており、各地の五重塔について知ることができる。

香山墓所 － 萩市の天樹院、大照院、東光寺とともに長州藩主の墓所となっている。香山墓所には明治維新当時の当主、13代毛利敬親などの墓がある。「萩藩主毛利家墓所」の一部として、国の史跡に指定されている。

枕流亭 － 薩長連合結成の密議のため、薩摩の小松帯刀や西郷隆盛などが山口を訪れた際に当時道場門前にあった枕流亭で長州方と面会した。その後何度か移築され、近年香山公園内に移築された。

露山堂 － 幕末、毛利敬親が藩庁を萩から山口に移したが、その際藩庁内につくられた茶室。茶室とは名ばかりで、その実堂内では討幕の密議が行われていた。その後維持管理が行き届かず荒れ放題になっていることを知った品川弥二郎がこれを嘆き、明治24年に香山公園内に移築した。現在も茶室として茶会などが催されている。

うぐいす張の石畳 － 香山墓所に至る石段の前にある石畳の上で、石畳を強く踏みつけたり手を打ったりすると、「キュ」という音が返ってくる。これは周囲の地形や石段による音響効果のためであるが、意図してそのように作られたものではなく、偶然の結果であると考えられている。

★香山公園

国宝瑠璃光寺五重塔を中心にした公園。桜や梅の名所としても有名。園内には倒幕の密議が行われた露山堂や枕流亭など、明治維新を語るうえで重要な史跡が点在している。

園内には、幕末に毛利敬親が茶事にことよせて藩士と討幕の策を練ったといわれる露山堂[ろざんどう]や、薩長連合の志士が集った沈流亭[ちんりゅうてい]、明治時代以降の毛利家墓所、瑠璃光寺資料館などがある。

★山口県立山口博物館

主に電気や化学などの機械実物展示や模型展示、動植物の標本、大内氏、毛利氏の文化遺産などがあるほか、鉄道車両（キハ58[1]）で山口線の模擬運転ができるシミュレーターが設置されている。開館100年を迎えたリニューアルでは、ティラノサウルスの骨格標本や動植物ジオラマなども常設された。屋外には化石や古墳時代の石棺のほか、かつて山口線で使用されたD60形蒸気機関車が展示されている。

1912年（明治45年）4月に開館した防長教育博物館（後に、山口県立教育博物館）と、1946年（昭和21年）4月開館の山口県立科学教育研究所（後に、山口県立科学博物館）が統合され、1950年（昭和25年）7月に総合博物館として発足。1979年（昭和54年）の山口県立美術館開館に伴い、美術部門が分離される。

1967年（昭和42年）に改築が行われ、10月に鉄筋コンクリート建ての新館（現在の建物）が開館する。2012年（平成24年）に展示室改修と新しい展示品の導入が行われる。

大内氏

百済の聖明王の子琳聖太子（リンショウタイシ）が周防国多々良浜に着岸し、その子孫が同国大内村に住み、以来、姓を多々良、氏を大内としたといわれている。しかし、これは創作された伝説であり、大内氏の出自は不詳というほかはなく、周防権介を世襲した在庁官人であったようだ。

大内氏のことが歴史の上ではっきりしてくるのは、平安時代末期になってからである。仁平二年（1152）八月一日付の「周防国在庁下文」に、多々良氏三人、賀陽氏二人、日置氏二人、矢田部氏、清原氏の九人が在庁官人として連署している。これに多々良氏三名の名前があるのは、この頃すでに周防国内で大きな勢力に成長していたことを示すものであろう。

さらに、二十六年後の治承二年（1178）十月、多々良盛房・弘盛・盛保・忠遠の四人が流罪を赦されて、それぞれ常陸・下野・伊豆・安房の地から帰国したことが、九条兼実の日記『玉葉』に見えている。　多々良の名はその後も養和二年（1182）の「野寺僧弁慶申状案」や、文治三年（1187）の「周防国在庁官人等解状」にも見えている。以上のことから、盛房のころ、在庁官人として最高の地位を占めていたことが知られる。

このころから大内氏は、一族を周防国府周辺の要地に配して在地領主化させ、本拠地の吉敷郡大内を中心に勢力を拡大している。吉敷郡の宇野・吉敷・間田・黒川・矢田・陶の各氏、都濃郡の鷲頭・末武氏、佐波郡の右田氏などがそれである。

〈武士の時代ー中世の大内氏〉

大内氏は源氏の御家人ではなかったが、弘盛・満盛父子が平氏追討に協力して功を挙げ、源頼朝から長門国内に領地を与えられている。

ところで、大内氏が鎌倉幕府の御家人化した時期は明かではない。建長二年（1250）に幕府が京都閑院御所造営を奉行して、御家人にこれを割り当てたとき、大内弘貞も一部を分担しており、翌三年にも国内の争論に関連して六波羅探題から下知を受けていることからみて、このころまでに御家人化していたようである。　弘貞のあと、弘家ー重弘と継ぎ、元応二年（1320）に弘幸が相続したが、このころは、叔父の長弘が実権を握って惣領家を圧倒していた。長弘は重弘の弟で、鷲頭氏の名跡を継いでいた。

建武の新政で長弘は周防の守護に任じられ、ついで足利尊氏からも北朝方の守護に任命されたので、弘幸・長弘の対立は子どもの時代にまで持ち越された。

文和元年（1352）弘幸のあとを弘世が継ぐと、南朝方の周防守護として、北朝方守護の鷲頭弘直を本拠地の都濃郡に攻めてこれを討ち、同三年までに周防を平定した。ついで、

隣国の北朝方守護厚東義武を豊前に追って、延文三年（1358）に長門守護も兼ね、防長両国を大内氏のもとに統一した。

防長二国が南朝方の大内氏に統一されたことは、北朝方にとっても、九州の戦局に及ぼす影響が大きかったことから、足利尊氏は防長両国の守護に任ずることを条件に、弘世を味方にひきいれることに成功した。翌三年、弘世は初めて上洛して二代将軍足利義詮に謁っした。これよりさき、弘世は本拠を山口に移していたが、京都から帰国したのち、本格的な経営に着手し「西の都」と称された山口の基礎をつくった。

その子義弘は、九州探題今川了俊に従って九州に下向し、さらに明徳の乱では山名氏の討滅に功を挙げ、周防・長門・石見はもとより、豊前・和泉・紀伊の六ケ国の守護職を兼ねる大勢力にのし上がった。

ところが、足利義満に不満を持つ鎌倉公方足利氏満兼らと連絡しながら、和泉の堺で幕府に対する反乱の兵を挙げた。これが応永の乱で、結局この乱は失敗し、義弘は幕府郡に攻められて死んでしまった。

その後、家督は弟の盛見に受け継がれた。もっとも、応永の乱に義弘・盛見の弟である弘茂も義弘に従軍し、幕府軍に降って周防・長門の守護職を安堵されるということがあったが、盛見は弘茂を滅ぼしている。

盛見はその跡を義弘の次男である持盛に譲ろうとしたが、長男持世が将軍から安堵状を得、兄弟の争いとなった。結局、持世が持盛を滅ぼして家督を継いだ。なお、持世は赤松満祐が将軍義教を殺した嘉吉の乱の巻添えで重傷を負い、死んでしまった。

〈西国最大の戦国大名へ〉

その跡は盛見の子教弘が継ぎ、その孫義興の代には、父の遺領に加えて安芸・石見の守護を兼ね、さらに管領代として十年間山城守護も兼ねた。義興の一生は、ほとんど戦陣のうちに明け暮れ、内外ともに多難な一生であった。すでに家督相続前の明応元年に、十六歳で上洛して近江に出陣している。家督を相続してからは、同四年二月に長門守護代内藤弘矩・弘和父子を誅伐したのに始まり、翌五年には少弐政資と筑前に戦っている。

その前半生は一族や家中の内訌に悩まされながら、九州の少弐・大友氏らと筑前・豊前に戦い、後半生は出雲の尼子氏と安芸・備後の地に争った。

また、大永三年（1523）には明国の寧波で対明貿易の利権をめぐって、細川氏とも激しく対立した。このころ、大内氏の家中にも下剋上の風潮が押し寄せ、さきの内藤弘矩誅伐のあと、重臣杉武明らは義興を廃して弟の大護院尊光を擁立しようとした。この陰謀は露見して武明は自殺し、尊光は大友氏を頼って豊後に走り、還俗して名を隆弘と改めた。の

ち、永禄十二年（1569）に大友氏の援助のもとに、大内氏の再興を企てて山口に侵入し、毛利氏に討たれた輝弘はこの隆弘の子である。

一族の内紛を鎮めて間もない明応八年十一月、前将軍足利義稙が将軍職を追われて山口に下向してきた。義興は山口の郊外に居館を設けて義稙を手厚くもてなした。永正四年（1507）に義稙を擁して上洛し、翌年七月に将軍職に復職させた。同十五年に山口に帰るまでの十年間を、管領代として山城守護を兼ねて在京した。

その長期にわたる在京の隙をついて、安芸国には出雲の尼子経久が侵入して、大内氏の分国を脅かしていた。帰国した義興はみずから諸将の陣頭に立ち、たびたび、安芸・備後の各地に出陣して尼子氏と戦った。一進一退の戦況のうちに病を得て、享禄元年十二月山口で没した。享年五十二歳であった。

大内氏の全盛時代を現出したのは義興の子義隆で、大永四年（1524）以来、父に従って安芸に出陣し、尼子氏とたびたび戦った。享禄元年父の氏をうけて家督を相続し、領国も周防・長門・石見・豊前・筑前・備後・安芸の七ケ国の守護を兼ねる中国・九州の一代勢力となり、大内氏は最盛期を迎えた。さらに、日明貿易を通じて、その富力も抜群だった。

大内義隆↑

家督を継いで間もない天文元年（1532）から少弐・大友氏と豊前・筑前・肥前の各地に戦い、同四年三月に豊後の大友義鑑と和して、ほぼ九州の北部を制圧した。その後、将軍足利義晴の要請で上洛を計画したが、尼子氏の安芸への侵入が始まって対立が激化したため、分国の統治に専念することにして上洛を取り止め、安芸の毛利元就や石見の吉見正頼らとの結束を図った。

天文九年九月、尼子晴久が毛利氏の本拠地である吉田郡山城を攻めたので、義隆は本陣を岩国に移し、周防の守護代陶隆房（のちの晴賢）や長門の守護代内藤興盛らを派遣してこれを援け、翌十年一月に尼子氏を撃退した。

翌年六月、義隆はみずから出雲に出陣して各地に転戦し、翌十二年二月に尼子氏の本拠月山富田城を攻めたが逆襲されて大敗を喫し、五月に石見路をたどって山口に逃れ帰った。この戦で義隆の養嗣子義房は、出雲の揖屋浦で溺死した。この出雲遠征を最後に、義隆みずからの出陣はなくなり、武将としての活動は事実上終わった。

〈義隆の文化への傾倒、そして大内氏の滅亡〉

その後も戦いは各地で続いたが、軍事はもっぱら陶・内藤・杉氏らの守護代級の武将に一任し、自身は築山館にあって学問や芸能にふけった。また義隆自身は信者ではないが、キリスト教を保護して、ザビエルに領内での布教を許したことは有名である。

このような義隆の文化への傾倒が、譜代武将の信任を失うことになり、やがて陶隆房と義隆側近の相良武任との対立となってあらわれ、家中の一大事となった。天文二十年八月に重臣陶隆房は大内氏の重臣杉重知・内藤興盛らを味方にひきいれて、山口の築山館に義隆を襲った。

義隆は山口を逃れて長門国美祢郡の岩永へ落ち延び、さらに大津郡の瀬戸崎から海路を逃れんとしたが、おりからの激しい風波に阻まれてそれも果たせず、長門深川の大寧寺に引き返して自刃した。随行の家臣や公卿衆と共に、心静かに切腹したと伝えられている。こうして、栄華を誇った大内氏も重臣らの反乱によって滅亡した。

義隆の死後は、陶晴賢によって、義隆の甥にあたる大友晴英が豊後から入って大内氏を継ぎ、名を義長と改めたが、実権は陶晴賢が握った。

弘治元年（1555）十月、晴賢が安芸の厳島で毛利元就と戦い敗れて討たれたあと、防長両国は混乱して収拾がつかず、義長は周防郡に侵出してきた毛利氏に追われて長門の且山城に走り、同三年三月に長府の長福寺で自殺した。ここに大内氏は完全に滅び、防長両国は毛利氏の領有するところとなった。

大内氏年表

1152年　「周防国在庁下文」に多々良氏等が在庁官人として連署している。（この頃既に周防国内で大きな勢力か）

1178年　多々良盛房・弘盛・盛保・忠遠が流罪を赦されて帰国。（盛房の頃、在庁官として最高の地位にあった？）

1250年　幕府の京都閑院御所造営の際、大内弘貞が一部負担。

1320年　弘幸が相続したが、叔父の長弘（鷲頭氏）が実権を握る。

1333年　建武の新政で長弘が周防の守護に任じられる。その後足利尊氏からも北朝方の守護に任命される。（長弘と弘幸の対立）

1352年　弘幸の後を継いだ弘世は、南朝方の周防守護として、北朝方の守護鷲頭弘直（長弘の次男）を討つ。

1353年　弘世、周防平定。

1358年　隣国の北朝方守護厚東義武を豊前に追い、結果長門守護を兼ね、防長両国を統一。

1363年　南朝方から北朝方へ転向。

1391年　その子義弘は明徳の乱で、山名氏討滅に功を挙げ、周防・長門・石見に加え豊前・和泉・紀伊の守護職を兼ねる大勢力に。

1399年　義弘は足利満兼と共謀した応永の乱で敗北し、死去。

1401年　義弘の弟の盛見と弘茂の家督相続の争いを盛見が制し、家督を引き継いだ。

1431年　盛見死後、義弘の長男持世と次男持盛が家督争いを行い持世が制した。

1441年　持世、嘉吉の乱の巻添えで死去。そのあとは盛見の子教弘が継ぐ。

1494年　義興が家督相続。

1507年　義興を頼って山口に下向してきた、前将軍足利義稙を擁して上洛し、将軍職に復職させる。

1528年　義興の嫡子義隆が家督を相続し、この時代大内氏は最盛期を迎える。

1536年　豊後の大友義鑑と和し、九州の北部を制圧。

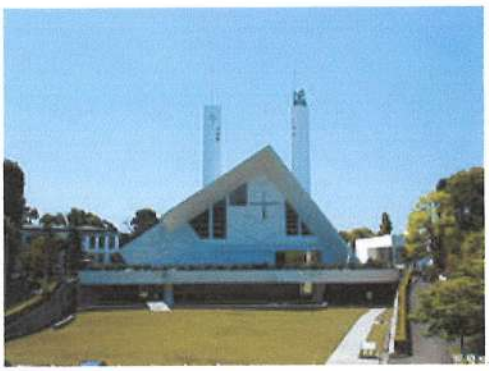
1542年　義隆、出雲遠征で尼子氏に敗北し、武将としての活動を終わらせる。

1551年　大寧寺の変により、義隆、重臣陶隆房らに襲われる。義隆自刃により、大内氏滅亡

1555年　陶晴賢により、大内氏を継ぐことになった義長（義隆の甥）が、毛利元就に敗れて、大内氏完全に滅ぶ。

以上

★山口サビエル記念聖堂



山口サビエル記念聖堂（やまぐちサビエルきねんせいどう）は、山口県山口市にあるカトリック教会の聖堂。カトリック広島司教区に属する。ザビエル記念聖堂とも呼ばれるが、施設名としてはサビエルと濁らないのが正式である。

フランシスコ・ザビエルの来日（山口での布教活動）400年記念として1952年（昭和27年）に建てられた。初代の聖堂は、ザビエルの生家で、スペインのナバーラ州パンプローナにあるザビエル城を模して建てられたもの（パンプローナ市は1980年に山口市と姉妹都市提携を結んでいる）で、市民にも広く親しまれていた。しかし、1991年（平成3年）9月5日に失火により全焼。サビエル記念聖堂の所有者であるイエズス会より多くの資金援助を受け、更に、種々の教会関係機関、山口信徒、ならびに山口市民、全国から寄せられた善意の募金により1998年（平成10年）4月29日に再建された。

再建された聖堂は、イタリア人神父のコンスタンチノ・ルッジェリと建築家ルイジ・レオニのデザインによるもので、高さ53mの2本の塔とテントを模した大きな屋根が全体を覆う構造をもつが、これはカトリック教会の伝統的な建築様式と比してかなり斬新なものであった。

初代聖堂の面影をほとんど残すことなく再建された聖堂は、当初、従前の聖堂の姿に慣れ親しんできた市民から異論が起こった。しかし、2本の尖塔をもつ白色の教会堂は緑豊かな風景に違和感なく調和しており、現在では山口市民の憩いの場として親しまれ、山口を代表する観光地として定着している。

山口市の中心市街地は高層建築物が少ないため、亀山の中腹にたつ50m超の2本の塔は遠くからでも眺めることができ、いわば山口市のランドマーク的な存在ともなっている。日中15分ごとにはカリヨンの鐘が鳴らされるが、その鐘の音は、市民に時を知らせる調べとして旧聖堂の時代から親しまれ続けている。